

無人島日記

大村伸一

一日目

最初の日、無人島は意外と小さくて、横になると足が海水にひたってしまう。そのまま眠ると、眠っている間に集まってきた魚に足の爪を食われ、もしも僕が救出されたとしても、爪のない足では政治家になる道は閉ざされてしまうだろう。とはいえ、僕は政治家になるつもりなどもうとわないので、魚達に思う存分僕の足の爪をふるまったのだ。

次の日になると、無人島は意外と大きくて、島のまわりを一周するのにたぶん一月はかかるだろうと思った。小の月なら三日ほど足りないかもしれない。なにしろ小の月の月のちいささといったら比べるものがなくて、もしも僕が名前をつけてよいのなら、あの小さな月には「ほし」という名前をつけるところだ。だが、僕には名前をつける権限は与えられておらず、それを「ほし」と呼ぶことはできない。

それから毎日、島は大きさを変え続けたので、僕はこの島の大きさについてそれ以上考えることをやめた。

無人島とは言いながら、僕がここに漂着したとたん、この島は無人島ではなくなっているはずなのだが、おそらく行方不明になった僕を見つけ出したとき、誰もがこの島を「無人島」と呼ぶだろう。もしも僕が救出されず、このままこの島で息を引取ったとすると、その場合にはこの島はまぎれもなく「無人島」ということになる。いずれにしてもこの島は「無人島」と呼ばれるのだ。だから僕もまたこの島のことを「無人島」と呼ぶだろう。

無人島には人間はいないが人間以外の動物は数え切れないほど存在する。残念なことに僕は動物の名前を何一つ知らないで、僕にとってはこの島は人間も動物も何ひとつ存在しない島のように見えるだろう。名もなき動物がこの島では当たり前なのだ。名前をつけられているという特殊な存在は、この島では僕しかいない。いや、僕もこの島に漂着したときに自分の名前を忘れてしまった。何かに頭を打ち付けてしまったのだろう。最初の日、僕は頭から血を流しながら、海の中に足をつっこんで眠ったのだ。魚がついばんでいた僕の足の爪には、も

しかすると僕の名前がマジックインキで書いてあったかもしれない。幸運にも油性だったら、僕はまだ名前を持っていられたかもしれないのだが、今では爪と一緒に名前を失ってしまった。

二日目

無人島だからといって家がないわけではなく、廃屋のたぐいは幾つも見つけれられた。さすがに平屋しかないのだけれど、つい昨日まで誰かが住んでいたとしか思えないほど掃除され、床に埃がたまっていないどころか、窓ガラスにも曇りひとつない家の中にはある。僕は夕暮れになるとそういう家に行き、お湯を沸かしてコーヒーを入れる。(ガスコンロまで使えるのだ。ここは本当に無人島なのだろうか)熱いコーヒーの入ったカップを真新しい円テーブルの上に置いて、僕は部屋の隅に立ち、それを見つめる。日が暮れるまでそうしていた。注がれたコーヒーの熱さと夕日の冷たさを、コーヒーカップがどのように中和していくのか観察していたのだ。

僕はコーヒーの味が嫌いなので、カップに口をつけることも、そばにいることもしたくなかった。もしも無理にコーヒーを飲んだなら、僕の肺の細胞が苦痛のあまり腫れあがり、口から飛び出して、床の上に散らばるだろう。

床の上に湯気をあげながら散らばっている熱で膨れた細胞は、甲高い声で叫びながら思い思いの方向に逃げて行く。かつて肺であったことを恥じているかのように、慌てふためいて逃げて行く。僕はぼんやりとその様子を見ていたのだが、よく考えれば肺が火傷をしていなくなってしまうのだ。すぐに呼吸ができなくなるのに決まっている。そう気づく間もなく、貧血のように頭がくらくらしてきた。このまま酸欠で死んでしまい、この島は再び無人島になるのだろうか。などということも次第に考えられなくなってきたのだが、いつまでたっても死ぬ心配はなかった。どうも、人間は肺がなくても生きていけるらしい。多少、息苦しさは感じるものの、それもいつもより多めに水を飲めば楽になり、一時間もすると慣れてしまう。勿論、すでに死んでしまっているために、苦しみを感ぜないという可能性もあるのだけれど、なんとなく死んでしまったという感じはしないので、きっと僕はまだ無人島にいるのだろう。

逃げていった肺細胞、それも焼けどで腫れあがった肺細胞を追いかけて、僕は山道を下って行った。険しい山道には尖った岩がいたるところにあり、僕の手ひらはそれらの岩で切り裂かれ、山道には僕の血の跡が残った。

これが無人島漂着二日目の出来事である。二日目はこのようにして終わった。

翌朝になると家はすべてなくなり、山を登る道さえ雑草に隠されてしまっていたので、あの家を探しに戻ることもできなかった。ただ、僕の肺細胞が逃げ出したことだけは確かで、それ以来、気をつけないと呼吸することを忘れて気を失ってしまうのだった。

三日目の朝、僕は、肺細胞をみつけるために出発した。

手紙 一通目

君がこの手紙をいつ、どんな経緯で読むことになるにしろ、こうして、手紙を書き続けることで、君を身近に感じられ、孤独が紛れるということに気づいたから、また、手紙を書くことにしたよ。

僕は子供の頃から名前に興味がなかったの、動物も植物もほとんど区別することができない。犬とか猫とか馬であるとか、花とか雑草などという一般的な名詞を使うことはできても、それぞれの種類を表わす固有名詞を知らないの、まるでこの島は顔のない生き物が漂う灰色の場所のように、君には見えるだろう。

それでもこの島の動物について書いておこうと思うのは、君のいる世界、僕のいた世界で見られる動物と、この島に棲息する動物の間には大きな違いがあると同時に、同じものごとの裏表のような関係も感じられて、君ならきっと興味を持ってくれるだろうと思ったからだ。もしも興味がないようだったら、この手紙はくず入れにでも放り込んでくれていい。

まず、どれから話そうか。そうだな。

今朝のことだ。真水を集めるために島の奥にある池というか、大きめの水溜りに向かった僕は、途中でなにか馬のような生き物に出会った。初めて見た種類だった。それは特に僕を警戒する様子もなかったが、それはこの島にこれまで人間などおらず、危害を加えられたことがないからだろう。

遠くから見るとその馬のような生き物は(君は野生の馬を見たことがあるだろうか。そもそも

も現代に野生の馬などどこかに生きているのだろうか)あえて言えばシマウマのような模様を体の上にまとい、注意して見ていないと、姿が見えなくなる。ただ、シマウマと違い、その皮膚に描かれている模様は色彩も豊かで、熱帯の鳥や魚の色使いを盗んできたのではないかとさえ思えた。しかし、色があることだけでなく、その模様自体が特別なのだということは、すぐそばに近づくまで分からなかった。

すこしも逃げ出す気配がなく、それよりも僕に興味津々といった風情のその馬のような生き物が、手を伸ばせば触れられる距離に近づいたとき、僕はその膚の上にびっしりと描かれた模様が、単なる迷彩ではなく、何かの文字、それも規則正しく並べられた文字だということが分かった。その文字を詳しく読んでいくと、どうも昔このあたりにあった商店の、売買を記録した出納簿のようだった。というのも、そこにはかなり国際的に有名なブランドの商品名、納品数、価格、支払い方法などが本当に小さな文字で書かれていたからだ。

あまりにも細かな文字だったから、それが人間にできるような仕事でないことはすぐに分かった。おそらく、何かの印刷機械によってその文字は印字されたのだろう。馬が間違っ、その機械のスイッチを入れてしまったのだろうか。いや、無人島であるこの島に、店などあるはずがない。だとすれば、その模様は、自然淘汰によって得られた贈り物であると考えしかかないのだ。

長くなってしまった。そろそろ終わりにしよう。

そうそう、その出納簿の模様を持った馬は、よほど僕が気に入ったとみえて、それからずっと僕についてきている。金も店もないこの無人島で、出納簿などなんの役にも立たないが、いつか救出された日には、役に立つのかもしれない。

三日目

二日間の無人島生活で分かったのは、人間は呼吸しなくても生きてはいけるが、食べ物がなくてはすぐに死んでしまうということだ。同じように、人間は時計はなくても生きていけるが、カレンダーがなくては生きる意味を見出せないのだということにも気づいた。

朝、目覚める前のまどろみの中でそのことに気づいた僕は、目が覚めると森でみつけた大きめの木の幹の皮をはいで、そこにボールペンでカレンダーを書いた。何日の間漂流していた

のかは分からないから、ここに来る以前に使っていたカレンダーを再現することはできそうになかった。この島に着いた日を無人島紀元0年1月1日として、一年分の日付を決定した。通信機も何もないのだから、いつ救助されるのかは分からない。この一年のカレンダーのできるだけ多くの日付けが無駄になればよいのだが。

一月一日は、暦の上では小島、人生の転機が訪れるでしょう。大勢で食卓を囲むと吉。一月二日は、暦の上では肺焼、おでかけの前は火の元に注意しましょう。嫌いな飲み物は断る勇気を。

こんな具合に、毎日の占いも書いておいた。

そうこうしていると、空腹が耐えられないほどになってきたので、何か食べられるものを求めて、あたりを探索してみた。三日目の天気は曇りで、風はなく、生温かい空気が島の上に淀んでいる。僕は島の中央にある、小高い丘の上に登った。そこからは、島の全体が見渡せた。ちいさな島だ。ちょうど島の反対側にバナナの木が実をつけているのが見えたから、朝食はバナナに決めた。

丘の上からバナナの木まで行く間に、出納簿ゼブラのつがいとすれ違った。出納簿ゼブラというのは、僕が名づけたこの島の動物の名前だ。シマウマによく似ているが、模様が赤、黄色、青、オレンジ色と鮮やかで、しかも遠くからみると模様だが近くに寄るとそれが潰れかけた食料品店の出納簿になっているのが分かる。模様だと思っていたのは、びっしりとかきこまれた文字と数字なのだ。つがいの出納簿ゼブラは発情しているらしく、体に纏っている明るいオレンジ色と赤の模様だけが溶けて足をつたい足元に流れおちていた。詳しいことは分からないがその溶けた模様の中に精子と卵子が潜んでいて、地面の上でまざりあい受精するらしい。子供が生まれるまでの半年の間、僕はこの島で救出されるのを待ち続けることになる。

バナナの木の下に辿り着くと、それはバナナではなかった。

四日目

火傷で腫れ上がり逃げ出した僕の肺の細胞は、島の至る所に隠れ、繁殖を繰り返しているらしい。四日目の朝に、肺細胞新聞というものが配達されていたので、僕もようやくその事実

気づかされた。発行は月市出版社。おそらく肺細胞のダミー会社だろう。

新聞のどのページにも染みとしか見えない細かい文字がびっしりと書かれていて、細胞ならではの紙面に仕上がっている。

彼らがひとつも僕の目に止まらなかったのも、新聞を発行し始めたのも、彼らの知能が高いからだ。

もちろん僕は、肺細胞が知的だということは、随分前から知っていた。なにしろ、東洋では呼吸法だけで解脱できてしまうのだし、第一、話ができるのは肺が存在するからだ。以前は、そのことを誇らしく思ったものだが、肺のなくなってしまった今、僕にはそれは他人事としか感じられない。

肺細胞が隠れていると書いたけれど、それは僕の間違いかもしれない。というのも、僕が根元で眠っていた木の枝に産み付けられているカマキリの卵、それはもうすぐ孵化しそうに乾いているのだが、それがどうも肺細胞のように見える。かすかに膨れたり萎んだりを繰り返しているのだ。カマキリの卵ならそうはならないだろう。こんなところに、こんな形で肺細胞がいるのかと思い、改めて島を見直すと、そこら中に肺細胞が侵略しているのが分かった。

島には視界を遮るような丘陵も森もなく、ただ砂浜が広がっているだけだ。だから、海岸のこの場所からでも、立ち上がれば、島の海岸線のすべてを見渡すことができる。そして、島を構成する砂浜の砂の中には必ず大豆ほどの大きさの錆色の塊が混じっている。細胞はそんなに大きくないから、ずっと気づかなかったのだが、それが火傷で腫れた肺細胞なのだ。

肺細胞かどうかは簡単に確かめられる。まずその錆色の塊を波打ち際まで持って行き、海水に漬ける。砂粒であればそのまま沈んでしまうだろうが、それが肺細胞の場合には、一分もしないうちに溺れて苦しみだす。それで分かるのだ。

しかも火傷をしているので、そのあと海水から引き上げても、すでに塩に冒された細胞は痛みで苦しむ、やがて動かなくなるだろう。

こんなふうにして、僕はなくした肺を見つけ出した。

カレンダーの占にはこう書いてあった。

一月四日は、暦の上では砂肺、失せ物は意外に身近な場所にあるでしょう。

五日目

おとといの夜までは波の音がうるさくて眠れなかったのだけれども、昨日の夜は静かでぐっすりと眠れた。夜の間中、波の打ち寄せる音がしなかったからだろう。

朝になっても波の音はひとつもしていなくて、ようやくそのことに気づいて不思議に思いはじめたら眠っていられなくなって目が覚めた。

確かに砂浜で眠りについたはずなのだが、目が覚めた場所は繭の中だった。寝相が悪いにもほどがある、でも海底で目覚めなかつただけまだましなのだろうか、そんなことを思いながら立ち上がる。想像通り、繭の中はどこも丸みをおびていて、立ち上がろうとするとぐらぐらと揺れる。幾度も失敗しながら、繭の壁に手をつけて、なんとか腰を持ち上げられるようになる頃には、繭の外は陽も高く昇ったようで、繭の壁が明るく光り、繭の中の様子もはっきりと見えるようになった。見えるようになっても特に何か特別なものがあるわけではなく、ただ汚れた足が見えるだけだ。

光の中に浮かび上がる繭の模様は文字にしては曲線が少なく、地図にしては目印が何もなかった。それが実は、この島では宴曲な言い回しなど不要であるためにそのような文字が使われているからなのか、あるいは、この島には何も特別なものがないからそのような地図が使われているからなのか、あるいは両方だからなのか、なんとも分からないので、はっきりと文字ではないとか地図ではないとか決めつけることができない。

崩れそうになるバランスに気を配りながら、さてこれは何なのだろうかと考え続け、繭の模様をじっとみつめていると、やがて模様はすこしずつ動きだし、見知らぬ人の顔に変わった。

顔は目だけを動かして、繭の中の様子を確認めると、何か話しかけてきた。繭の中は薄汚いと同時に臭い。まともな人間がいられる場所ではない。こんなところにいる奴は屑以下だ。頭がおかしくなってるんだろう。などと言う。おそらく曲線の少ない文字で記される言葉を使っているせいか、あまりにもとげとげしくて僕は聞いていられず、両手で耳をふさいでしまった。

顔は僕が耳をふさいでいることになど興味がないらしく、それからしばらくの間話し続けた。やがて、話に飽きたのか口を閉じ、目も閉じて表情をなくし動かなくなってしまう。突然何も言わなくなったので、僕はかえって不安になり、どうしても動こうとしないのだと気づくと、つい声をかけてしまった。

「どうした」

その僕の声は、繭の壁に当たるとはじき返され、また反対側の壁にぶつかってさらにはじかれ、どんどんスピードを増していった。それにつれて僕の言葉はだんだん早口で甲高くなり、やがて何を言っているのか聞き取れなくなる。おそろべきスピードで言葉がぶつかるため、繭の壁は次第にずたずたに切り裂かれ、切れ端があたり中に舞いあがる。その言葉が次にどこに当たるのかは、まったく予想できなかったが、壁にできた顔と僕自身には決して当たらなかった。勿論、それはただの偶然だったのだろう。やがて、言葉がかん高くなりすぎて聞き取れなくなってしまうと、ついに僕の目の前にある壁の顔の額に命中してしまった。

顔は声を跳ね返すことがなかった。そのまま、額の中に吸い込まれた言葉は消えてしまった。額には言葉が吸い込まれた小さな穴だけが残っていた。

言葉で人が死ぬことはないにしても、あたりどころが悪ければ何がおきるかわからない。僕はびくびくしながらすこしも動かない顔を見つめていた。

どれだけ経っただろうか。顔の唇が突然ぴくりと動き、目を開いた。それから額に開いた穴を中心に、ひび割れが始まり、ぎざぎざの割れ目が顔全体に広がっていった。額から顎の先端まで到達する頃には、顔全体を細かいひびが覆い、これではもうこの顔は生きていられないだろうと思った。その想像はすぐに現実になり、顔は碎けて粉々になった。繭の、顔のあった場所には穴が開いて、そこから海岸が見えた。波の音が戻ってきた。

カレンダーの占いにはこう書いてあった。

一月五日は、暦の上では繭顔、ぐっすり眠れば吉。

一月六日

砂浜で眠るのは危険だ。

たとえば、潮の干潮によって、気づかぬうちに海中にひきずりこまれ溺死する可能性がある。

あるいは、海中で生息する肉食の生物が、海岸にあがってきて、眠りこけている僕を獲物だと勘違いして食べようとする可能性がある。

真夜中に大きな竜巻がやってきて、気づかないほど熟睡している僕の体をひろいあげ、雲よりも高い空から水面に放り投げるという可能性も決してなくはないだろう。

意外にもこの無人島が凶悪な海賊の隠れ家であり、三ヶ月ぶりに帰って来た海賊に、眠っている間に発見されて奴隷にされるとか即座に処刑されるとか、そういう可能性も忘れるわけにいかない。

砂浜で眠るのはとても危険だ。

ともかく、砂浜は危険なので、僕は海岸から離れた島の奥のほうで眠ることにした。

島の中央には、低い木立の森がある。そんなに大きな森ではないが、海の危険からいくらかなりとも僕を守ってくれるはずだ。

勿論、その場合は、森に潜む空腹な虎や巨大な食肉植物の危険を忘れることはできない。あるいは腐敗した屍骸から発生した有毒ガスが僕の神経を冒すことになるかもしれないし、なにより大木が強風に倒されぐっすり眠っているぼくの体を下敷きにして潰してしまう可能性は非常に高い。

にもかかわらず、僕は森の中での生活を選んだ。砂浜に敷き詰められている錆色に腫れた肺細胞が、僕の夢のなかに現れては、一生動き続けなくてはならない肺の苦しみを訴え続けるからだ。もう肺のなくなった僕には関係のないことだと何度も言うのだけれど、細胞はすこしも僕の言葉に耳を貸そうとしない。おそらく、肺細胞には耳がないのだろう。あるいは、火傷のせいではなくしたのかもしれない。

森の奥で生活してしまうと、船であれ飛行機であれ、僕を救助に来た誰かに気づかれるチャンス逃してしまう。だから、昼間は海岸で、流行のダンスの練習をし和漢三才図会を暗誦し（大声で）夕方になると砂で恐竜(レキシコザウルス)を作った。

恐竜は作るべきではなかったようだ。あまりにもみごとに作られた恐竜は、作った僕が見ても本物にしか見えない。これでは救援隊もうかつに島に近づけないだろう。恐竜が和漢三才図会を朗読しながら流行のダンスを踊っている島を発見した救援隊が僕なら、遭難者はもう生きていないと判断する。

夜の暗闇のなかで、恐竜の姿はことさら黒く巨大に見えた。

カレンダーの占にはこう書いてあった。

一月六日は、暦の上では肉食、万事過ぎたるは及ばずながらよくもわるくも

一月七日

天井の夢を見た。

島の上空に天井ができて、もう空は見えないのだと、恐竜が言う。

よく見ると、天井には足跡がたくさんついていて、それが誰の足跡か分かれば、僕はこの島から救出されるらしい。

ただその足跡はとてもちいさくて、地上からでは、その足跡の特徴をとらえることも難しそうだ。それに第一、ここは無人島なのだから、人間の足跡ではありえないはずなのに、どうみてもそれは靴跡にしか見えない。するとこれは僕をこの島に閉じ込めておくための罠でないとは言い切れない。

靴跡なら、だれであっても残すことはできるのだし、そうなれば、足跡をつけたのは誰であってもいいことになる。無人島に最もよくみられるのは水溶性の生物だが、そういう生物は決まって足も手もないので、足跡の持ち主ではないだろう。島の陸地に棲む生き物はだれにも姿を見せないのも、はたして靴跡を残せるのかどうかは分からない。陸上でみつけれられる足跡と言えば、僕のものしかないのだ。すると、あの足跡は僕のものだろうか。僕にはすこしも分からない。

天井はどこにでもあり、午後になると少しずつ空から地上に下がってくるのが分かった。それでも天井の足跡は小さいままなので、僕には誰の足跡なのかはわからないままだ。

天井は、なにか石のように硬い素材でできているらしく、海鳥が天井にぶつかると、すぐに動かなくなり、そのまま海面に落ちて行く。夜には、天井は、僕の身長よりも低くなるだろうし、そのとき、ぼくは立ち上がることもできなくなるだろう。

天井は、ずっと水平線の向こうまで続いていた。

カレンダーにはこう書いてあった。

一月七日は、暦の上では落天、上をみて歩くと落とし穴に落ちて大怪我。靴の裏に糞。

一月八日

三つ目の藪から抜け出すと島はずいぶん様子が変わっていた。勿論、他に誰もいるわけではないが、島全体が板張りになっていて、どこへ行くのにももう靴はいらない。

これは床と呼ぶしかないので、僕はそれを床と呼ぶことにした。

床は、海に向かっては波打ち際からすこし海に入ったところで切れていて、海面を覆うほど広がりがあるわけではない。

海辺から離れ、島の中のほうに入っていくと、小さいとはいえ森までもが、床敷きになっていた。木が生えているところは、木の輪郭にあわせて床にも穴があいているので、森にあつらえて作ったように見える。

島の東側の断崖は、地面が途切れたところから50cmほど先まで床があった。床の端まで行くのは怖くてやめたが、板と板の隙間からははるか下の海面で、岩にくだける波がはやくおいでと待っているのが見えた。

床は歩くとがたがたと音がする。床の下の地面が平らではないので、どうしても体重をかけると思わぬところがぶつかるのだろう。島の西には僕の身長三倍ほどの岩石があった。なにもない砂地にそんな大きな岩石がひとつだけあり、どこか遠くから飛んできたものらしく、岩肌には送り状がはりつけてある。輸送の途中で輸送船が難破したのかもしれない。

その岩も、板によって周りを囲まれ、岩石のてっぺんがすこし見えるだけになってしまっていた。岩と板の隙間がかなりありそうなので、板を剥がせるのではないかと、指を隙間にこじ入れてみたりしたが、簡単には剥がれないようになっていた。もしかすると、この島全体を覆っている板は、すべてがひとつにつながっているのかもしれない。

島の北には真水をたたえた小さな池があるのだが、板はこの池だけは遠巻きにして、2mほどの距離をおいている。真水が苦手なのかもしれない。ためしに板の表面を舐めてみると、歩いているときには気づかなかったが、すこし湿っていて味は塩辛く、舌が触れるとぷるんと震えて離れようとした。やはりなにか生き物なのかもしれない。

カレンダーにはこう書いてあった。

一月八日は、暦の上では木目。足に刺さったとげはすぐには取らないと化膿するでしょう。

一月九日

今日は卵をみつけた。

僕の頭よりも大きくて、オレンジ色をした卵は、海の中からたくさんの泡とともに浮かび上がり、風船のようにはねながら島に上陸してきた。

卵だということはすぐに分かる。海の中から生まれたためか形は完全な球だったが、オレンジ色に輝く表面はぼんやりと濁っていて、その内側に何かうごめくものがいた。それがひくひくと動くたび、卵はふらふらと揺れ、床の上に落ちるとすぐに跳ね、くるくるとまわって、また新しい方向にころがって行く。

僕の近くまで飛んできたとき、少し触れようと手を伸ばしたのだが、卵はそれを避けるように遠ざかってしまう。体温を感じて避けたのか、それとも体臭を嫌ったのか(僕はもう十日近くも風呂に入っていないのだ)、もしかすると、僕の目に反射した光におびえたのかもしれない。僕は逃げていく卵の後を、少し遠くから追いかけて行った。

板張りの床は卵が跳ねるのに丁度いいらしく、卵が弾むたび硬い音をたてる。そして、卵はどこかに留まる気配もなく、思いのままに島の中をうろついている。

卵は海から来たのだから、卵の中にいるのは魚なのかもしれない。魚は決して地上に出てくることはないが、卵の中にいれば安全だから、卵から生まれ出る前の楽しみとして、こんなふうに陸上を旅しているのではないだろうか。卵の殻から透けて見える何かには、確かに背鰭のようなものがあるのが分かる。

それとも卵は生き物ではなく、海の中で産まれた渦が、泡の中にとじこめられてできたものなのかもしれない。あんなにたくさんの泡と一緒に浮かんできたことを思えば、その推測も間違っていないような気がする。このあたりの海では、渦は右にも左にもまわっている。だから、あの卵も、ふらふらとどこに行くのか定まらないのだろう。

しかし、オレンジ色の魚がいるだろうか。海の渦がオレンジ色だったことがあるだろうか。そう考えると、この海でオレンジ色のものなど一つしかない。卵は夕日なのだろう。いずれ夕日になる今はまだ夕日ではない何かなのかもしれないが。

僕は卵が弾んだ床の上に顔を寄せて確かめてみた。確かに、卵が触れた部分は焦げていて、そのにおいを嗅ぐと、肺のなくなって内側が透けて見える胸にどこからか黒いものがあふれてきて、そのまま床の上に零れ落ちていった。その黒いものを手で掬い胸の中に戻そうとして、僕はしばらく卵から目を離していた。

そしてもう一度飛び跳ねた卵に目をやったとき、卵は床から弾んでそのまま空に浮かび、あっという間に夕日になってしまった。

この島では、夕日はこのように産まれるらしい。

カレンダーにはこう書かれていた。

一月九日は、暦の上では卵生。廊下を走ると落とし物をするでしょう。

一月十日

救助隊はなにものかによって妨害されているらしい。

この十日間、飛行機の爆音どころか、船の姿さえみえないのは、そういうことだと考えるしかないだろう。いや、あるいは僕を除くすべての人類が絶滅したという可能性もないではないが、そういう事態になりながら僕だけが生き残るという状況は考えにくい。小説でそういう話を読んだことはあるから、昔はそういうこともあったのだろうか。だとすると、人類は何度も絶滅を経験してきたのだ。しかし、これまでそういうニュースを見かけたことは一度もないから、今では、人類絶滅の事態は未然に回避できるようになっているのに違いない。

島はとても小さくて、もしも僕以外に誰かが住んでいたら、砂の中以外に、どこにも隠れるところはない。砂の中で、十日も生きていられる人間はいないはずだから、この島にすんでいるのは僕だけだろう。砂のようにざらざらした膚に風があたって口笛のような音を響かせている恐竜と鉢合わせしないように、僕は恐竜と反対側の砂浜にいつもいるように注意をおこ

たらない。今朝、恐竜が砂の中から這い出してきた時、偶然そこに居合わせた僕は、恐竜がなにか呟いているのを聞いた。恐竜は足跡にすぎないとか、右足は死んだとか、世界は我が小水であるとか、意味はまったくわからなかった。それでも僕は、恐竜に近づきすぎているのだろう、いつか救出されたなら、僕は爬虫類になる手術を受けようと自分でも気づかない間に決意していた。それはあまりにも気持ちの悪い決意だったが、やめようという気持ちにもなれなかった。そういうことがあったので、僕は、いつも恐竜とは反対側の岸にいるのだ。

夕方になると島は急に雨雲に包まれ、待つほどもないうちに豪雨になった。雨は島のそこそこに生えていた細い木々を根こそぎにして海へ連れ去った。島を構成する砂もまた、水に溶かされて砂色の奔流にかわり、海の底へと流れ去っていった。島の反対側にいた恐竜はやはり砂でできていたのだろうか、雨に打たれるとたちまち崩れ溶けて、足もとの砂に混ざり流されていった。砂をほとんど失った島は、もはや海と区別がむづかしいほどだったが、僕はまだ島に島とともに取り残されている。

やがて、砂の最後の一粒までもが海に流された時、無人島は人がいないだけでなく、島もない島になってしまったのだった。

島のない無人島と僕は夜の間ずっと何もない海の上を漂っていた。十日間一緒に生活していたのに、無人島がこんなに無口だとは知らなかった。話しかけたこともなかったのだから、知っているはずもないのだけれど。

僕は無人島に、僕が世界中を旅するようになったいきさつや、旅でであったいろいろな出来事話を話した。なにも返事を返してはくれなかったけれど、夜明けを迎えたころには、僕はずっとこの島と暮らしていくことになるのだと確信していた。

いつのまにか、僕は気を失っていたらしい。気がつくと僕は、見なれた無人島の砂浜に倒れていた。

島の一本の木の幹に刻まれた、どこかで見たことのあるカレンダーにはこう書いてあった。

一月十日は、暦の上では海滅、雨降って地なくなる。

一月十一日

では誰が妨害しているのだろうか。僕には一切心当たりがない。陰謀というものがそういうものだとしても、何の地位にもない僕を誰が何のために陥れたのだろうか。肺を奪われ、呼吸もできなくなった僕を故郷に戻れないようにする必要がどこにあるのか、僕にはまったく想像できない。

今朝、自動販売機の夢を見た。僕が自動販売機で売られているのだ。機械の中は暖かくて、すこし汗ばむくらいだった。誰も買いにこないから、ずっと待っていた。機械はどこかの無人島にあり、近くに駅も大通りもないのだから、それは仕方のないことだ。僕はずっと待ち続け、やがて他の商品がすべて売り切れ、さらに釣銭も無くなってしまった。

目覚めると、無人島には自動販売機は一台もなく、僕も売り出されてはいなかった。島にあるものと言えば、いつも逃げ出そうとしている夕日と、人食いバナナの木だけだ。人食いバナナとは勿論、人が食べるバナナという意味ではなく、人を食べることに夢中なバナナという意味だ。島に人間がいたことなどないのに、人間の味を知っているのは、生まれる前にたらふく人間を食べていたからだろう。

バナナの木は島に三本あり、その中の一本だけが人を食べたいと思っている。近づくと今にも襲いかかろうと葉を揺らすので、すぐに分かる。たまたま風がふいて葉が揺れることもないではないけれど、人食いの木は風に逆らって人間に近づこうとするので、見分けるのはそれほど難しくはない。

昨日の嵐で床板はすべて剥がれ、島のそこそこに濡れて破れた板が散らばっている。僕は、適当な大きさの木材を集め、椅子を作った。海を航海する船を見つけるために砂浜に座っていると、尻が殊の外痛くなるからだ。不安定な砂浜でも傾くことがないように、椅子には調節用の歯車を二十一個使った。潮が引き、砂が乾き始めると歯車はゆるむようにまわり、椅子は二倍の大きさになる。潮が満ちて砂が海水に沈むと、椅子ができるだけ濡れないように、歯車は甲高い音をたててまわり、やはり二倍の大きさになる。そんなふうには、椅子は大きくなり続けて、昼にはバナナの木よりも高くなった。僕は、昼食のためにその椅子に登ってバナナを収穫した。

午後になると島に散乱した材木はほとんどが芽をだし、太陽の光を我先に吸収し始めた。木の芽のまわりから光が消え、かわりに闇が生まれると、闇は幾重にも重なり合って闇の花びらになる。花は次第に大きく成長して、板の表面を覆い隠し、島のいたるところに夜の闇が忍

び寄る。

僕は、その花を一輪折ると、肺がなくなって空っぽになっている胸に刺した。花はその場所がとても気にいったようで、さらさらと音をたてて増えていった。僕は花の成長の邪魔にならないように、ずっと息を止めていた。

明日になれば、僕は闇の花の言葉を話しているのに違いない。

カレンダーにはこう書かれていた。

一月十一日、暦の上では闇至。三人よれば門の前、筆も硯も質流れ。

一月十二日

この島ではよく半分だけの生き物をみかける。

例えば、夜が明けきらない朝に砂浜を歩くと、縦に真っ二つに割れた巻貝の片割れだけがもぞもぞと歩いている。断面からは、内蔵がやはり断面図のように見える。それでも何かの張力が働いているのか、内部の器官が溢れ出すことはなかった。

半巻貝(僕はそう呼ぶことにした)はそこら中にいて、簡単に捕まえられる。しかし、半巻貝を焼いてみても、煮てみても、まったく味はしなかった。失われたもう片方の身が、すべての旨みを持って行ってしまったかのようだ。

半巻貝はありふれているが、他にも半分生物(僕はこう呼ぶことにした)はいる。

鳥のような羽根を持つ魚は、いつも南から飛んで来る。陸には降りず、いつも海上で生活している。魚であるからにはとでもいうように、泳ごうとして水面下に頭を潜らせるのだが、魚の羽根は海水よりも軽いので、どうしても海中に潜ることができない。それでも逆さまになり無理やり潜水するので、羽根の付け根で胴体がちぎれ、羽根を持たない頭部(ただし鱗はあるようだ)は水中に逃れ、思いのままに泳げるようになる。一方で、羽根とそれに続く尾鰭の部分は海面に残され、それでも生きているのだが、どこに行くでもなく水面をさまよう。

無防備な羽根魚(羽根から後をこう呼ぶことにした)は、やがて海面を滑るように走り回る猫(波猫と名付けた)に、襲われて簡単に彼等の餌になる。海中に泳ぎ去った羽根なし魚(と僕は名付けた)のほうは、すぐに隠れてしまうので、どうなっているのか分からない。

空には、鳥の羽根を持つ魚以外にもたくさん生き物がいる。ペンギンの羽根のような形をして、くるくると回りながら空から降りて来るその生き物は、回転しながら空中の虫を食べているらしい。羽根にしか見えないその姿のどこに口があるのかは、暗くなるまでずっと見ていたが分からなかった。

ペリカンの左半分のような姿をした鳥(左ペリカンと名付けた)も空を飛んでいた。左半分だけでどうしてバランスを取れるのか、どれだけ見ても分からないのだが、おそらく羽根を巧みに使い体の中に大気を溜めて浮力を得ているのだろう。左ペリカンは地上に近付かず、夕陽の方角に飛び去っていった。別の島に巣があるのかもしれない。

島の奥には、右豹や、前虎、四分の一手長猿など、きりのないくらい半分生物がいる。四分の一だけの生物や頭だけの生き物もいなるのだが、それらすべてをひっくるめて、ぼくは半分生物ということにしている。人間は僕一人だというのに、言葉をややこしくしてもしかたがないからだ。

右豹や前虎のような猛獣には、気をつけなくてはならない。もしもどこかで出会ったら近づくにしろ逃げるにしろ、欠けている側に身を隠すことだ。万が一襲われると、この体のどちらか半分だけしか食われないのだろうが、食べ残された半分になって生きている自信はまだない。

今日は一日、生物を眺めていた。食べられそうな生き物はいなかった。

カレンダーにはこう書かれていた。

一月十二日、暦の上では減数分裂。名前の画数が奇数ならよい出会いがあるでしょう。

一月十三日

昨日の夜は半月だった。ということは、この島に来てもうすぐ半月が経とうとしている。

この島に着いた夜、海には無数の風船が浮かんでいた。海の上に揺れる青白い風船は夜空をぼんやりと照らしていたので、僕は迷わずにこの島にたどり着けたのだ。

夜になるたびに、海上の風船はやはり輝くのだけれど、すこしずつ光は弱まり、それにつれて

空の月がふっくらとしてくる。月は僕の気づかない間に地上にやってきて、風船を奪っていくのだろうか。

今では島よりも大きくなった椅子はもう月と同じくらいの高さに達している。明日になれば月よりも高い空間に達するだろう。下から見てみると、月がときどきこの椅子に腰掛けているのが見える。ただでこの椅子に座らせておくわけにはいかないので、僕は座席代を徴収するために、椅子をよじ登って行った。

請求書を口にくわえ、腕を伸ばして横木をつかむ。思いのほか成長した椅子は、横木間の距離が僕の身長をかなり超えているので、上の横木につかまるためには、すこしジャンプしなければならない。その間、支えるものの何もない僕は、もしも風でも吹いたなら、地面にまっすぐに落ちてしまうだろう。

椅子を半分くらい登ったあたりで、夜が明けた。夜が明けたら月はいなくなるだろうと思っていたが、そんなことにはならなかった。月は椅子に座ったまま居眠りを始めて帰るのを忘れているらしい。昼の強い日差しを受けながら、僕は椅子を登り続けた。

そもそも椅子は登るために作られているわけではないので、少し登るだけですぐに座らずにいらなくなる。椅子で座れるのは座席だけだから、僕は一番上を目指して、登り続けなくてはならない。椅子の横木は、特に硬く鋭い木でできていて、僕はそれを十分に磨いておいたので、手をかけるたび、僕の手のはらは深く切り裂かれ、それ以上登ることをためらわせる。

大気が薄くなってきたことは、服に霜がおりにきたので分かった。たぶん、空気が薄くなっていて、息をしていれば息も苦しくなるのだろう。肺を失ったことが、意外にも登山には有利だったのだ。

口にくわえている紙には意味の分からない数字が書かれていた。だが、ここではそれが単なる数字ではないことが分かる。簡単な暗算で解読すると、請求書だと思っていたものは実は椅子が僕に宛てた手紙だった。

「はやく来て、月をどけてくれ」

それだけが書かれていた。

夜になり、また朝が来たとき、月の姿がはっきりと見えた。あれからずっと居眠りを続けてい

るらしく、あいかわらず半月のままだ。

最後の横木をよじ登り、月の隣に立ったとき、椅子がぐらりと揺れて、歯車が回り始めた。回転は歯車から歯車へ次々と伝わり、椅子は急にまた空に向かって大きくなりはじめた。さすがに目のさめた半月は僕に気づきもせず椅子から飛び上がると、もうずいぶん下の方になった自分の住処に飛び降りていった。

椅子は月のことなど少しも構わずに大きくなり続けた。空は相変わらず頭上にあり、太陽は少しも近付かない。このまま椅子が大きくなれば、宇宙の反対側に辿り着けるはずだと思い、それが何日後になるのか、僕は暗算を始めた。

そのとき、真空の中で聞こえるはずのない音が聞こえた。木にヒビが入り、割れる音だった。その音は、続けて二十一回なり続けたので、僕にはそれがあの歯車の壊れた音だと分かった。急に椅子が沈み始め、なににすがりつこうとも、同じ加速度で地上に引きずり下ろされていく。

島はみるみる近づいてきた。僕には近づく島の形さえ目に入らなかったが、ただカレンダーだけははっきり見えた。僕はその島にある唯一のカレンダーの上に落下する。

そのカレンダーにはこう書いてあった。

一月十三日、暦の上では月民。旅先で新しい友人ができるでしょう。

一月十四日

カレンダーのおかげだろうか、空から落ちたというのに僕は怪我をすることもなく無人島に戻ってきた。ちょうどカレンダーの上に落ち、頭をかばっていた僕の腕が思い切り押し付けられた一年間の日付けは、僕の腕にすべてうつってしまった。これで何処にいても日付けが分からなくなることはないだろう。

空中で壊れた椅子の破片は島にほとんど落ちてはいなかった。あんなに高くでばらばらに砕けた椅子の破片は、おそらく世界中に飛び散ってしまったのだ。それでも僕のように島に戻って来たものもいる。昼過ぎに砂浜で砂に半分埋もれていた歯車をみつけた。椅子の二十

一個の歯車以外に歯車などないだろう。ただ、拾ってみるとそれは砂に埋もれていたのではなく、割れて半分になった歯車だった。

案外半分生物なのではないかと思ってしばらく見ていたがすこしも動かない。死んでしまったのか、初めから生きていないのか、それとも死んだふりをしてしているのか、どれであるにしろ、歯車は何も食べようとしなかった。しかたがないので半分の歯車をポケットに入れて、僕は名前もつけずにそのまま忘れてしまった。

夜になり冷たい波が黒く変わって僕の踵の下の砂を盗んでいく頃、ポケットの中で歯車のカケラが動きだして、ぼくはようやく思い出した。歯車があまりにも暴れるのでポケットから出してみると僕の手のひらの上で歯車のカケラはうす青色に光り始めた。みつめていると歯車は光り始めると回りかけては歯が足りずに止まってまた暗くなる。繰り返し明るくなったり暗くなったりし続ける歯車に夢中で気がつかないのだ。僕の目の前にやはり半分になって輝く歯車を持った半月が立っていた。

「恐ろしいですか」

半月が尋ねた。

「なにも恐ろしいことはありませんよ」

僕がそう答えると、半月はなにか困ったように僕を見るだけだ。

僕と半月は砂浜に座って、二つの歯車を並べてみた。すると、二つはピッタリとくっついて、なめらかに回り始めた。回るにつれて光は濃い紫色になり、夜空を紫に変えてしまう。

「私はこんな夜空にはいられない」

半月は僕の方を見ずにそう言った。

「紫色の空ですね」

そう答えると、半月は歯車を両手で包み込んで、それ以上空の色が変わらないようにした。それでも半月は、色が変わってしまった空には帰れないらしく、そのまま立ち上がると島の中

に歩き去っていった。

半月が歯車を二つとも持って行ってしまったので、僕は半月の後を追った。口に椅子の着席代に加え歯車の代金も加算した請求書をくわえて、僕は半月を捜し回った。月のない夜はことのほか暗く、半月どころか島さえもどこにあるのか分からない。そして、朝が来ても僕は半月をみつけられなかった。

カレンダーにはこう書いてある。

一月十四日は、暦の上では半客。逃した魚は大きくもあり小さくもあり。

一月十五日

半月を探し続けていたからみつからなかったのだろう。月は毎日変わるものだというのを忘れていた。今では、月はずっと大きくなり半月の面影など無くなっているはずだ。いや既に月ですらないかもしれない。もうみつけることなど不可能だ。

突然、金属の繰り返しぶつかるけたたましい音が聞こえて、僕はあわてて海岸にもどった。音は、水平線の向こうから聞こえているようで、波のない海面には機械の音しかなかった。それでも機械のたてる音は次第に大きくなり、やがて水平線から現れたのは、すべてが鋼鉄でできた巨大な口だった。口は口と同じ大きさの胴体の先端についていて、胴体は水平線の向こうへと続きどれ程の長さなのかは分からない。胴体も鋼鉄でできていて、水蒸気を吹き出すボイラーや動力を伝えるさまざまな形をした機械でできているようだった。

口の周囲にはやはり鋼鉄の五本の腕が同じ間隔で並んでいる。鉄骨を何本も捻り合わせた腕は滑らかに動き、不完全な口にどこからか取り出した部品を継ぎ足して完全な口を作り上げる。完成すると口は何か食べ物をくれと言うように大きく開き、口の奥から舌が伸びて来る。それは舌にしては真っ直ぐで、口から空中に突き出されたまま自分からは動かない。口を完成した腕は、今度は舌に関心を移し、舌に絡みつくようにして探りながら、口の奥の方へと入り込んでいく。腕は、舌が動けないように固定し、それから口と舌の間に梁を渡す。舌が完全に口に固定されると、腕はまた口に作業を移し、口の前に鉄骨を組み合わせてまた新しい口を作る。胴体だと思ったのは、たくさんの古い口の輪郭でできているらしい。そして、新しい口が作り出され、胴体が少し伸びる。

この機械はどうも自分で自分を継ぎ足して海の上を旅しているようだ。

水平線に現れたその機械は見ている間にも少しずつ延びてこの島の方へ向かって来る。それにつれて騒音も激しくなり、水平線と島までの半分に達する頃には耳を両手で塞いでも、やかましきは何も変わらないほどだった。僕は手で耳をふさぐのをやめて、足元に落ちていた巻貝で耳に栓をした。巻貝の渦巻の中には海が生まれてから今までの波音がすべて記録されている。巻貝からこぼれる波の音が耳の中に広がり、機械の音は、聞こえなくなった。

機械があるのなら人もどこかにいるはずだ。しかし人の気配はまったく無かった。試しに大声で呼んでみたのだけれど勿論誰も出て来はしない。機械の音がうるさくて何も聞こえないのかもしれない。もっと近付けば声も届くだろうし、第一機械に乗り込めたならそのまま人のいる場所に辿り着けるのではないだろうか。

僕は口の機械が島の近くを通るように思えたので、砂浜でそれを待っていた。口は見ている間にも伸び続け口はどんどん近づいて来る。

近くで見るとそれがどれほど大きい物なのか分かった。おそらくこの島なら十は確実にはいらるだろう。このまま口が島まで来たら、機械に押しつぶされて島は地上から無くなってしまふのではないだろうか。

そんなことを考えながら砂浜に一日中いた。午後になって機械はそれまでよりも速く動きどンドン胴体が伸びているように見えたのだが、島にはそれほど近づいて来ないように思えた。夕方になっても、まだ岸からは遠く、まるで海が口よりも速く広がっているみたいだった。

夜の闇が海を隠す頃になっても、機械は島に届かなかった。

カレンダーにはこう書かれていた。

一月十五日は、暦の上では大口。門限破りでネジをまわせば夜も夜明けも朝めしまえ。

一月十六日

朝になると島のはるか向こうの海上を、機械仕掛けのトンネルが通過していた。昨日のあれは、鉄道のトンネルだったようだ。海の上を大陸と大陸をつなぐトンネルが、あんなふうに乗

られているとは知らなかった。

海上100mほどに浮かぶトンネルは、低い反響音を響かせているが、もうあんなにうるさくはなくなった。先端の口がもう遠くに行ってしまったのだろう。耳の中が気にいったのか巻貝は外に出てこず、僕はずっと波の音だけを聞いている。トンネルは空中に浮かんでいて海面に触れる部分がないので、トンネルによじ登ることもできない。せいっぱいの声でよびかけてみても、誰も出ては来なかった。案外、人間は一人もいないのかもしれない。島の反対側でトンネルの行き先を眺めてみると、トンネルは反対側の水平線の向こうに消えていた。海の真ん中にトンネルだけが残されていた。

鉄道が走れば、この島にも気づいて救出されることもあるかもしれない。あるいは、この島に駅ができて、簡単に故郷に戻れるようになるかもしれない。僕はトンネルを見ながら、そんなことを考えていた。

海岸を歩いていると、魚が打ち上げられていた。半分でなく全身まるごとの魚だった。僕と同じくらいの大きさがある。鱗は薄く、内側の肉や内臓が透けて見えるのは、魚が深海に棲んでいたということだろうか。魚は鰓をゆっくりと開いたり閉じたりして、まだ生きているようだ。

僕は魚の尾びれをつかんで自分の小屋に持って帰ることにした。一日くらいはこれで食いつなげるだろう。魚を収穫したのはこれが始めてだったので、僕は間違えてしまったのだ。尾びれを持ってひっぱると、魚のうろこが砂地に食い込み、そのあたりに生えている木に突き刺さり、なかなか前へ進めなくなる。鰓をつかんで引っ張れば、うろこは砂をなめらかに進み、木に当たってもすりぬけてしまうはずだ。でも、そんな簡単な事に気づかなかった僕は、どんどん重くなる魚をひきずって小屋をめざした。うろこは砂を含んで重くなり、木に突き刺さると抜けてしまう。小屋にたどり着いた頃には魚はすでにうろこの剥げた、骨だけの姿になってしまっていた。骨に残った少しの肉を指でこそげて食べてはみたが、砂が混じっていてとても食べられたものではない。僕は小屋の裏手に魚の残骸を捨てて、もう一度、海岸まで戻ることにした。もう一尾くらい魚をみつけられるかもしれない。

海岸にはそれ以上魚はいなかった。あの魚が倒れていた(魚は「倒れる」というものだろうか。もともと横になって泳いでいるのに)あたりには、手のひらほどの大きさの鱗がたくさん落ちていた。一枚を手に取り透かして見ると、文字にしか見えない模様があった。見た事のない文字だったが、何となく僕には読めるような気がした。僕はあたりに散らばる鱗を集めて、海水で洗い、乾かしてから束ねてポケットに入れた。どの一枚にも模様があつて、どの一枚も他

とは違っている。退屈な無人島での生活もこれで少しは面白くなるかもしれない。

鱗を探しながら拾って行くと、やがて僕の小屋についた。ぼくは思わず自分にも鱗があるのかと腕を顔に近づけて見てしまったが、そこに鱗はなかった。よく考えてみれば、さっき運んで来た魚の鱗なのだから、僕の小屋に辿り着いて当たり前だ。僕はあたりまえだ、あたりまえだと口ずさみながら小屋に入り、眠った。

カレンダーにはこう書いてあった。

一月十六日、暦の上では魚運。自分が何者であるかを問うとき、そこに自分はいない。なんてね。

一月十七日

体がほとんどどろどろに溶けた大きな魚が僕の小屋にやってきて、鱗を返せと詰め寄る。

魚が身動きするたびに、溶けた肉や内臓が小屋の中に飛び散り、生臭いにおいで僕は息もできなくなる。確かもう10日以上息をしていなかったのだから、本当は息ができないのは魚のせいではないはずなのだが、止まっている呼吸もできなくなるほどのおいだったのだ。目の前で魚が口を開いたり閉じたりするたびに、煙草のにおいもしたように思えたが、それは嗅覚がおかしくなっていたからだろう。

魚が言うには、あの鱗には自分の日記や手紙が記録してあるのであり、僕のように関係のないものは読むべきではない。いや読むことは魚類に対する侮蔑であり生命全体に対する暴挙だ。ということなのだが、舌がないためろれつのまわらない魚の言葉は聞き取りにくく、あるいは鱗を読み終えたら早めに返却してくれと、穏やかに依頼していただけなのかもしれない。

いずれにせよ、魚は話している間にも溶け崩れ、最後まで話を終えずに骨の残骸にかわってしまった。

汚れてひどいにおいになった小屋にはもう住めないので、小屋を捨てて東の方に歩いた。東には島で一番背の高い木が生えている。その下なら住みやすいだろう。

木の下に辿り着くまで砂道は森の中をいく度も方向を変えながら続いていた。ぐるぐる同じ場所をまわっているかと思うと突然、道が途切れ崖になっていて、道に何度も迷ったが、道は

ずっと一本道だった。

鱗はその道にも落ちていたので、僕は拾いながら歩き続けた。探せば島のどこにでも落ちていたのかもしれない。日の光に透かして見ると、鱗の模様は光を複雑に屈折させ世界の何処にもない色に輝いた。輝きが眩しくて、どういう文字が書かれているのかは分からなかった。それでもあの魚の鱗に間違いはない。新しい住処についたらじっくりと調べてみようと思っていた。

道は見た目通りの道ではないのかもしれない。あの木に少しも近づけないまま、森の中で僕は一夜を過ごした。

かれんだーにはこう書いてあった。

一月十七日。暦の上では鱗拾。探し物はあらゆる所でみつかるでしょう。

一月十八日

その木の根本は保護色になっていて、既に辿り着いていたことにずっと気づかなかった。

上を見ながら歩いていけば、すぐに分かったのだろうが、地面の鱗を拾いながらだったので、気づかないまま何度も木の前を通り過ぎていたようだ。道は入り組んでいて同じ場所を通ってもなかなか分からない。もしかすると、初めから同じ場所をまわっていただけかもしれない。森はそれほど大きくはなさそうだった。

新しい小屋は半日ほどで組み立てられた。建築にお誂えの材木がすぐ傍に山積みになっていたし、二度目だから迷うことも少なかった。材木の中には、とりわけ大きな鱗が混じっていたので、みつけるとそれを集めた。ズボンの右ポケットはもう鱗で膨れ上がり破けそうだ。左ポケットは空っぽだが、穴が空いているのでしかたがない。

小屋が完成したお祝いにポケットから鱗を一枚取り出し読んでみた。

「十四時十七分」

秒までは分からないが無人島の生活にはこんな時計で十分だ。他の鱗と区別できるように、

僕は鱗の端を少しだけ折り、胸ポケットにしまった。

それから海岸にでた。海はすぐそこにあった。島のどこにいても、すぐそこに海はある。僕の耳のなかにいる巻貝が、海の在処を教えてくれるからだろう。もしかすると、この島は海の底にあるのかもしれない。どんなに天気の良い日でも、洗濯したシャツは少しも乾かないし、島の上空を飛び交う飛び魚もやけに多いような気がする。

海岸ではピアノを拾った。砂の上に鍵盤が出ていたのでピアノだということはすぐに分かった。手で周囲の砂を掻き分けて掘り出すと、古いアップライトだった。木製の部分は湿っていたが、金属には錆もなく、乾かせば演奏を楽しむことができるだろう。ピアノには鱗はないので、小屋に運ぶのは難しくなかった。

小屋の前のある位置にピアノを置くと、色を変化させ背景にとけこもうとする木の保護色は、ピアノの姿を写しもう一台のピアノを作り出した。木の皮を思い切り勢いをつけて剥がすと、木は痛みに一瞬気を失う。その瞬間に僕は新しいピアノを少し離れた木陰に移し、木がそれを二度と隠せないようにした。新しいピアノはとても乾燥していたので、無人島にしては見事な音を響かせた。

この島にピアニストが流れ着くことがあれば、そのピアニストは少なくとも失業することはないだろう。

皮を剥いだ木の幹にカレンダーがあった。そこにはこう書いてあった。

一月十八日は、暦の上では裏島。演奏会に誘うときは、チケットを二枚用意して吉。三枚だと告。

一月十九日

ピアニストも砂浜の砂の中から発掘できるのではないかと、朝から何度も海岸に行った。ピアニストの頭や、ピアニストの足、それにピアニストの尻を拾うことはできたが、どれも全部バラバラで、まともなピアニストは一人もいなかった。

仕方がないので朝食を摂った後、ピアノの練習を始めた。ピアノと一緒に掘出した教則本を

使えば、夕方までには名曲を何曲か演奏できるようになるだろう。海岸の水が溜まっているところを見つけ、適当な大きさの魚を手に入れた。海の魚は人の血と同じ組成なので肌にしばらくくっつけていれば簡単に癒着してしまう。手にくっつけた魚は思い通りに動くので、生臭いことを我慢すれば、好きなだけ指を増やすことができる。

僕はまず、十三本の指のためのエチュードから始めた。ひとつおり弾けるようになると、魚の指はもう音楽無しで生きられなくなる。そうなった魚は死ぬまで鍵盤を叩き続けて干物になるが、それほど美味しい干物にはならない。

日の暮れる頃にはずいぶん上達していた。あの難曲といわれるピアノソナタ左短調二番を感動的に演奏できたのだから。演奏が終ると拍手は鳴り止まず、僕はアンコール用に練習しておいた右半分のパianoコンチェルトを、音符を一つずつ跳ばしながら演奏した。だれも元の曲が何なのかわからなかっただろう。それでもまだ拍手を続けるので、僕はピアノ用のピックを取り出し、ピアノの弦でアルファンブラ宮殿の思い出を演奏した。

まだアンコールを求める声もあったが、僕はわざと怒ったふりをしてピアノから離れて散歩に出た。出がけに、手に二つまみの塩を擦り込むと、くっついていた魚は呆気なく剥がれた。いつものように、喉の奥に苦い塩の味が溢れてきた。魚はなくなった肺の代わりになるのかもしれない。

散歩に出た僕の後をピアノが追いかけてきた。ピアノは演奏が気に入ると、演奏者と寝たがるものだ。勿論、本気になったピアノから逃げられるものはいない。地上の楽器のなかでピアノより速いものはいないのだから。

僕はポケットから、短調の和音を取り出し、森の中に向かって投げた。すると、ピアノは本能に従ってその後を追いかけて行った。これで朝までもどらないだろう。

僕は一人で演奏の余韻に浸りたかったのだ。無人島だというのに、一人になるのがこんなにたいへんだとは思わなかった。

カレンダーにはこう書いてあった。

一月十九日は、暦の上では演奏会。南東の地面にたくさん「拍手」という字を書いておくと、運気が増します。

一月二十日

朝、帰って来たピアノは僕に隠れて何かを食べていた。見ようとすると思隠すので、しばらくしてから調べてみたら、食べていたのは野生の和音のようだった。何匹か落ちていた食べ残しを見ると、それは短調の旋律からこぼれた和音らしく、黄色でしかも大きかった。昨日、森に投げた和音とは違っていたが、どこかしら似ている。和音が森で繁殖しているのかもしれない。

ピアノの練習はとても時間がかかるので、僕はもう飽きてしまった。それで、ピアノの蓋の内側に魚を何匹か貼り付けて、魚達だけで練習させることにした。魚はピアノの蓋がなかなか気にいらなかったが、指を切って血を一滴与えると、すぐにピアノになじんでいた。魚達の練習するピアノのメロディは小さな島のどこからでも聞くことができた。ピアノはこの地上で最もすばらしい発明品だ。

それから僕は海岸に出て、上空の鉄道のトンネル(というのだろうか)を見上げた。かすかに駅の構内アナウンスが聞こえてくる。もう開通したのだろうか。昨日までとの違いといえば、聞こえるか聞こえないかのそのアナウンスだけだったので、僕にははっきりとは分からなかった。アナウンスは聞こえても列車の音がしないのだから、まだ開通はしていないのだろう。

海にも好き嫌いがあるということ、この島に来て初めて知った。

島の東側の海岸では、海の水はいつも干いていて、遠くまで海底が見渡せる。島の西側に行くと、海の波は僕に向かって寄せてきて、足に絡みつくように渦巻き、すこしも引き返さない。島の西側だけが満潮で、東側だけが干潮なのかとも思ったが、島の中央にそびえる山の上から見ていると、どちらも同じように満ち干きがあるのだ。

どうも僕は東側の海には嫌われていて、西側の海からは好意を抱かれているようだ。

そこで考えたのだが、東側の海にどんどん入っていけば、海がどんどん退いていくのだから、そのまま歩いて故郷まで帰れるのではないだろうか。歩いて帰るにはすこし遠すぎるかもしれない。自転車ならどうだろうか。

だが、帰る途中で西側の海に出会ってしまうかもしれない。海には境界線がないのだから、どこからが東でどこからが西なのか、決まったものではないだろう。もしも旅の途中で西の海

に会ってしまったら、海は僕をめざして殺到し、一瞬にして僕は水に飲み込まれ死んでしま
うだろう。

夕方は、東側の海で海岸線を追いかけて時間を潰した。よほど嫌われているらしく、僕は一切
濡れることがなかった。

明日は西側の海に行ってみることにしよう。

海を追いかけるのに疲れて小屋に戻ったとき、カレンダーにはこう書いてあった。

一月二十日は、暦の上では海割。食べるために芸術があるのではない。芸術を食べるのだ。著
名な音楽家の言葉。

一月二十一日

もしかすると、僕はこの島で生まれたのではないだろうか。

二十日間で、この島の生活にも慣れ、ついついそんなことを考えるようになった。
というのも、この島は毎日のように地形が変わり、昨日あったものが今日は別のものに変っ
ているなどいつものことだ。それでも、僕はそれを当たり前のように感じ、そういう環境の中
で発狂することもなく生活を続けている。何も知らない人間が、そんな状況に置かれて、生き
抜くことなどできるものだろうか。

とはいえ、僕には以前この島にいたというような記憶はまったくなく(毎日変るのだから、覚
えていなくても不思議ではないけれど)、この島に懐かしさを感じるわけでもない。そもそも
僕がここで育っていたら、この島を無人島とは呼べないだろう。

ピアノの練習をしていた魚達は、一昼夜でみごとな演奏をするようになり、早朝にコンサ
ートツアーに出かけてしまった。だから今日はピアノ演奏を聴くことができない。仕事がな
くなったピアノもまた森の中に姿を隠している。ときどき不協和音が聞こえてくるのは、和音
の断末魔なのだろう。

端の欠けた貝殻が16:40だったとき、僕は西の海岸に向かった。道端に生えている木の幹に
よくカレンダーの模様があることに気付いた。去年の日付だったり、十年後の日付だったり

と、偽物だから間違いだらけだ。最初に僕がカレンダーを刻み付けた木がこんなにも短い期間にこれほど繁殖するとは予想していなかった。このままカレンダー樹が増え続ければ、この島は偽物のカレンダーだらけになり、今日という日が本当はいつなのか分からなくなってしまいうだろう。早めに伐採しておかないと取り返しのつかない事になりそうだ。

西の海岸に辿り着くと、そこに海は広がっていなかった。水平線のあったあたりまでずっと砂浜が続いていた。そして砂浜のいたるところに、子供くらいの大ききで、オレンジ色の丸い塊がふるふると震えていた。ソフトクリームのように先端はねじれて尖っていて、よく見るとそれは回転し続けていて、その振動で震えているのだ。

甘いバニラのかおりがしたのでつい近づいてしまうと、それは結び目がほどけるように形を崩し、オレンジ色の豹のように素早く体を踊らせて、僕に跳びついてきた。あまりにも素早く動いたので、表面は一面泡に変わっている。ここが西の海岸であることを考えれば、それが海の水であることは明らかだった。僕の足や体や首に頭にと、次々にそれは跳びついてきて離れようとしな。水はぼくの体に纏い付きながら、ごぼごぼという深海で産まれる新しい水の声を聞かせていた。

西の海にいたすべての水が僕に抱きついてきたので、水は次から次へと重なり合い、どこまでも高い塔のようにそびえた。竜巻のように回り続ける海水の塔が夕日を受けてたくさんの色をきらめかせていることは、海水の塔の中に閉じ込められていても分かった。島がその光を受けて宝石のように輝いたからだ。このまま海水の塔は星のあたりまでも届くのだろうか。

水の中から見えたカレンダーにはこう書いてあった。

一月二十一日は、暦の上では海水塔。海岸で泳ぐときには水着を着ましょう。待ち人も待たずにいれば待たれず人。

一月二十二日

朝になっても、海水の塔は僕の上から離れず、僕は砂浜からどこにも動けなかった。

目だけを動かして島を見ると、黄色オレンジ赤色青色と木も砂浜も岩山でさえ原色に染まっ

ていた。海水のゴボゴボいう音に邪魔されて聞こえなかったが、海岸の波音や島を流れる二つの川のせせらぎも、原色になっているのに違いない。

海水の塔は既に大宇宙の中心にまで届いていた。僕はもう海の一部なのだろう、海水の分子の一つ一つの感じていることが分かった。だから、宇宙の中心で重くなる水圧と先端の渦が煮えているのが、僕ははっきりと感じた。海水の塔は進化を続け、宇宙の真ん中で、今では小さな星雲になっていた。無数の恒星と消滅のための空間が、海水の塔星雲には生まれていた。僕は子供の頃に宇宙の写真の本で、他にもないこの原色に輝く星雲を見たことがある。僕はこの星雲になるために生まれ、そしてこの島に流れ着いたのかもしれない。

星雲の先端が大宇宙の中心にあるジャイロスコープに触れようとした瞬間、島の奥の方ですべてを諦めたような切ない吠え声が轟いた。声は途切れなく続き、次第に大きくなり海岸に近づいてくる。

森の茂みが揺れ飛び出て来たのは、森に迷い込んだまま帰ってこなかったピアノだった。一日でどうしてそんなに大きくなってしまったのかは分からなかったが、ピアノはグランドピアノになっていた。島の何もかもが原色になっているというのに、ピアノだけは磨き上げられたばかりのように黒光りしていた。ピアノは海水がきれいなのか、海水の塔に向かって身構え、吠え続けた。僕の存在には気付いていないようだ。海水の塔の高い辺りを、抜かりなくにらんでいる。

ピアノの背後に、何か灰色の袋のようなものが見えた。その表面にはたくさんの鍵盤の形をした歯型がついていたので、おそらくピアノの食べ残しなのだろう。もう死んでいるのかすこしも動かない。ピアノは、海水の塔が北方に傾くと、逃すまいとするかのように、その後を追いつき、南に倒れそうになると、弦の音を響かせて海水の塔に飛びかかった。ピアノの動きはあまりにも素早く、その反動でピアノが食べ残していた袋のようなものは砂浜の上に弾き出された。

それは、ずっと行方の知れなかった半月だった。いなくなってからも随分経っているのに、半月はまだ半月だった。この島では月は他所とは違う存在なのかもしれない。でも、月の光は短調のソナタだから、それをみつけたピアノは、夢中になって食べ続けていたのだろう。大きな半月を腹一杯食べていたからピアノはグランドピアノに育ったのだ。ピアノはまだ海水の塔を睨みつけて唸っている。

砂浜に放り出された衝撃で半月が目覚めた。鍵盤の形に齧られてはいたが、目覚めて砂浜に立ち上がった半月の光は銀色で、原色に輝く島の全てのものにふりそそぎ、透明にしていった。光は順番に島を変えていき、やがて海の塔の中に射し込んだ。すると、宇宙の中心まで達していた海水は、一滴残らず一瞬で分解し、乾き切っていた西の海に降り注いだ。

海水の雨は全てのものの上に落ち、たちまち海を満たした。ピアノは海水に触れると白い煙を噴き上げながら苦しんでいるようだった。

雨の中で、カレンダーにはこう書いてあった。

一月二十二日は、暦の上では塩水。いつまでも変わらぬものに祟りなし。

一月二十三日

半月は自分が半月だということを忘れていた。

ピアノにあれだけ齧られた後では仕方がないことだろう。海水を大量に浴びて、半月の体の鍵盤の歯型はずいぶんと薄くなった。あと一日くらい今度は東の海の水を浴びれば、きっと元通りになるはずだ。そのかわりのように、ピアノは海水に打たれてずいぶん元気がなくなってしまった。木の部分に染み込んだ海水が次第に塩に変わり、夕方には黒いピアノは白いピアノに変わってしまうはずだ。ピアノが白くては目立ちすぎて、大好きな和音を捕らえることもできなくなるだろう。ピアノには運がなかったのだ。

水圧から解放された僕の心残りは、原色に輝く島を結局見られなかったことだった。もしかすると一瞬でも輝きが戻るのではないかと思い、午前中ずっと僕は砂浜から島を眺めていた。勿論、島が輝くことはなかった。宇宙の中心にまで届くほどの水圧のせいで、僕の眼球はこの島とは違うものを見ていたのかもしれない。

起きない輝きを待っている間、僕は何度も月に話しかけたが、月は何も答えなかった。月の身長(というか、直径)は僕の倍ほどもあり、もしも半月が暴れ出したら、僕はひとたまりもなかっただろう。月がこんなに大きいとは思っていなかった。さりげないふうを装って横にまわると、月の半分は機械で切断したらしく縁は完璧な円になっている。切断面は反射鏡のように磨かれていて、僕の姿がそこに映った。二十日以上自分の姿を見ていなかった。漂流する以前も何ヶ月も鏡など見なかったのだから、それは特別なことではなく、いつものようによ

く知らない誰かがそこにいた。もしも知らずに道ですれ違ったなら、自分だとはとうてい気づかないだろう。そうだ、これからは自分を見分けるために名札を胸につけることにしよう。僕はそれがとてもよい考えに思えたので、ポケットから大きめの鱗を取り出してみた。運良くその鱗には僕の名前が書いてあったので、シャツの胸のあたりに鱗を突き刺した。これで自分に気づかないことなどなくなるだろう。

半月は自分の断面を興味本位で見られるのが気に触ったらしく、体をねじって僕から断面が見えないように遠避けた。半月の気持ちを僕はそのときは気づかなかったので、新しい名札が似合っているかしらんと、半月が隠そうとしている断面を追いかけるように僕は回り込んだ。半月はとても嫌そうに、さらに体をねじり僕は追い回した。半月のまわりを何回僕はまわっただろうか。気がつくと、半月の体はすでに半分ではなく、完全な球体になっていた。ねじれすぎたからだろう。半月だったものはこんなふうにして満月が変わった。

カレンダーにはこう書いてあった。

一月二十三日は、暦の上では完月。バレエダンサーになりたかったあなたは、今日、なにもかもが見た目通りではないことに気づくでしょう。

一月二十四日

明け方、海から新しい風船がひとつ空に昇っていった。オレンジ色の風船は雲のあたりまで達すると、くるくると回転を始め、縦に細長くなって破裂した。

島みんながそれに気を取られている間に、コンサートツアーにでかけていた指が、いや魚達がけたたましい演奏と共に戻ってきた。

ちなみに「島みんな」というのは「僕一人」というのと同じほどの意味だ。

出発する前は確か十七本だった指、いや魚達は、今や五十三尾にも増えていた。排泄と産卵の区別をしない魚達はまだまだ指が足りないと言う。もっと音符の数の多い複雑な曲を演奏しなければ産まれてきた甲斐がないのだとも訴えた。魚達がそんな曲を求めて、結局この島に戻って来たことは明らかだった。

魚達はピアノに会いたがったがピアノは森の奥にいて砂浜にはもう出てこようとしなかった。真っ白のピアノになったことが恥ずかしくて誰にも会いたくないのだと、砂の上書き置きがあった。

森へ魚達を案内しようとする、魚達は海から離れたがらなかった、僕はシャツを脱いで、肺のあった空洞にしばらくいてくれるように頼んだ。肺のあった場所は僕の血液でいつも濡れていたのだし、僕の血は海水と同じ成分でできている。

僕が急にシャツを脱ぎ始めたときは、魚達も動揺したようだ。特に生まれたばかりの小さい魚は、おびえて海に戻ろうとしていた。だが、僕の説明を聞いて魚達はほっとして、おずおずとではあったけれど僕の胸の中に入ってきた。

海岸から離れるとき、僕はもう一度振り返り、砂浜を見た。今日はそこには何も打ち上げられてはいなかった。

森の中は暗く、もしもピアノが白色でなければ、とうていみつめることはできなかつたろう。ピアノは木の陰に隠れていたのだからなおさらだ。

ピアノは魚達を見ると再会を少し喜んでいたようだ。錆付いてはいたけれど低音の弦がかすかに鳴ったような気がした。それでも鍵盤の蓋を開けてはくれなかった。もしかすると、黒鍵も白く変わっていたのかもしれない。

ピアノと僕は魚達のコンサートツアーの話聞いた。魚達はどれも指ほどの大きさしかなく、声も小さく言葉をはっきりと発音できなかった、何度も繰り返し聞かなくてはならず、結局話は一週間の間続いた。僕は途中で二度、死んでいたのかもしれない。退屈した脈拍が逃げだし、数時間の間脈がなくなっていたのだ。

魚の話が終わる頃にはピアノは灰色に変わっていた。誰も真っ白のまま生き続けることはできない。

ピアノはもう魚達に演奏されたいと思っははいないようだった。五十三尾もの魚に触れられることに耐えられないのだと言う。魚達の前ではあからさまに言わなかったが、魚の体に染み込んである海水に、きとおびえていたのだろう。

魚達が語り尽くすと、僕と魚達はピアノを演奏することは諦め、帰ることにした。来たときよりも海岸はずっと遠くになっていた。島が大きくなっているのかもしれない。

夕方になって小屋の横に立っている木の幹の最初に作ったカレンダーを見ると、こう書いてあった。

一月二十四日は、暦の上では海蛙。森の中での一週間は海岸での一日だという報告がたくさん寄せられています。

一月二十五日

満月は朝からずっと空にいて、夜もそこから消えることがなかった。

満月になっても記憶はなくしたままなのか、呼びかけてみても応えない。記憶のないことを気づかれないのか、満月は島を真っ直ぐに見ようとしな。時々ちらりとこちらを横目で見ていることは隠しようがないのだけれど、僕と目が合いそうになると慌てて目をそらす。

海岸には梯子も脚立も落ちていなかったから、満月が空に昇るのに手を貸した誰かがいたのだろう。もしかすると、二つの半月に分かれ、お互いに支え合いながら昇っていったのかもしれない。満月の真ん中に縦にヒビが入っているように見えるのは、二つの半月の継ぎ目のようにも見える。よく見ればその継ぎ目の一番下に何か糸のようなものがぶら下がっているようだ。

明日、海からまた風船が生まれたとき、それにつかまって空に行き、月の様子をもっと詳しくみることにしよう。

魚達は僕の胸の中が気にいったらしく、いつまでたっても出ていこうとしなかった。シャツを脱ぐと胸の中で魚達がゆったりと泳いでいる。こんなふうに練習をまったくしなくなったのでは、すぐにピアノの演奏はできなくなるだろう。すっかり丸まると肥り、指とはすこしも似ていなくなった魚は、もう話しかけても何も分らないようだ。ピアノがいつか帰ってきて、この島には演奏のできるものは誰もいない。

魚がこのまま増え続ければ、僕の肋骨はいずれそれを支えられなくなるだろう。今でも魚の尾鰭が当たる度に肋骨は軋み、その痛みで僕は、もう一月近くしていない息が止まりそうになる。一日中、砂浜で鏡になった満月に自分の胸を映し、僕は魚の数を数え続けた。数える度に魚は増え、このままでは夜の間にも島にある自然数を使い尽してしまうだろう。新しい数字を見つけるためにカレンダーを確かめると、そこにはこう書いてあった。

一月二十五日は、暦の上では肋骨。大事なことは胸の奥、どれだけ秘密にしている、背中からだとすぐばれる。

一月二十六日

肋骨の間から増えすぎた魚がこぼれ落ちるとき、魚の鱗が骨に触れて、何かしゃらしゃらと音が響く。その度に鱗のカケラが骨に残って、僕の肋骨はまるで輪になった魚のように見えてくる。音は、微かだけれどいつまでも鳴り続けた。魚が抜け出してどこかに消えてしまった後でも、風に吹かれるだけで骨と鱗のカケラは触れ合い鳴り続ける。魚が、次々とかぼれていくので、前の音に後の音が重なり、やがて和音になる。魚はこの音が嫌いなのだろうか。音が大きくなるにつれて、魚は先を争って胸の中から逃げ出すのだ。それでよけいに和音は重なり続け、大きな音になっていく。もう、島のどこにいてもこの鱗の音は聞こえているだろう。空の月にも聞こえているはずだ。

骨が和音の振動で揺さぶられ、僕は痛みをうめき声をあげる。魚の数がいつこうに減らないのは逃げ出す魚と同じだけ新しい魚が生まれているということだ。途切れなく溢れ落ちる魚は、肋骨の上に鱗を次々と重ねていくから、鱗はすぐに分厚い層になり、どんどん隙間がなくなっていく。厚い鱗に覆われてもう僕の胸は魚の胸と区別がつかなくなっているだろう。

肋骨からの出口がなくなって逃げ出せなくなった魚は、それでも増え続けて僕の胸を内側から圧迫する。その力で胸だけでなく僕の体はどんどん大きく膨れていく。海から生まれるあの風船はこんなふうには作られているのかなと、僕は少しだけ思った。

鱗のカケラのたてる音は、もう新しい音が生まれなくなったというのに大きくなり続け、あまりにも大きな音に僕の鼓膜は破れた。新しい脱出口ができたので、破れた鼓膜をすり抜けてそこから魚は逃げ出し始めた。耳の穴をぬると魚が通り抜けるとき、僕は一つづつ何かを忘れていくようだ。この島に来る前のたくさんの旅と、旅で出会った女達の事をもう随分

思い出せなくなっている。

鼓膜が破れて僕にはあの和音が今も鳴り続けているのかどうか分からなくなっていた。鱗に体を覆われて僕は魚になってしまったのだろうか。魚なら、泳いで故郷に帰ることもできるかもしれない。でも、僕の故郷はどこだったのだろうか。体が膨れ上がり、浮き始めた。空に昇ってあの月の様子確かめよう。それとも宇宙の中心まで旅しようか。いつのまにか僕は気を失っていた。

気がつくと、僕は砂浜に倒れていた。島はとても小さくて、僕の足は島からはみ出し、海の波に浸っている。波の音が聞こえていた。あのうるさかった鱗の音はやんでいった。胸の中の空洞に海水が入ったり出たりを繰り返している。もう魚達の生臭いにおいもしていない。何があったのだろうか。頭を上げて辺りを見まわすと、僕のまわりの砂の上には、ピアノのペダルの形の灰色の足跡が残されていた。ピアノが助けに来てくれたのだろうか。でも、ピアノは僕よりも魚の友達だったはずだ。それに、ピアノは灰色に変わっていたけれど、足跡までもが灰色になることなどあるものだろうか。

僕は森の茂みに入っていく大きな灰色の後姿を見たが、それが灰色のピアノの本当の姿だったのか、それともピアノの影だったのか、よくわからないでいる。

カレンダーにはこんなふうに書かれていた。

一月二十六日は、暦の上では生風船。失せ物は耳の穴の中を探しなさい。特に横穴に注意。

一月二十七日

砂浜の砂は暖かかった。海の水は地表に上がってくるとゆっくりと冷えて、そのまま冷え続ければ世界は氷の下に隠されてしまうだろう。ただ、砂は決して冷たくなることはないので、海と陸との境界を形作っている。

そのまま砂浜で眠っていれば、僕も砂浜の砂に変わってしまっていたらろう。砂は、その一粒一粒が僕の一部であり同時に、一粒一粒が僕自身だ。たくさんの夢とたくさんの海の波の愛撫によって僕は这个世界から消えていく。砂とはそういう存在なのだから。

砂に関する底しれない洞察を続けていると目がさめてしまった。砂浜に手をついて起き上がると、僕はあたりにあったはずの足跡を探した。波に洗われてなくなってしまったのか、ピアノのペダルの形をした足跡はもうどこにも残っていなかった。

シャツ（まだ着ていたのだ）の前を開いて自分の胸を覗き込んでみると、肋骨と書いてあばら骨と読むその骨は、元のように鱗もなく、ただ青白い色に光っていた。肋骨の内側にあんなにいた魚はもう一尾もない。そして、胸の内側の空洞は夜の間乾燥してしまい、魚がいたことなど一度もなかったみたいだ。鼓膜ももう破れてはいなかった。人さし指を耳の穴に突っ込んでみると、ちゃんと途中で止まる。ただ、それでも島はひどく静かだ。海の水が希薄になり、もう波も大きな音を立てられなくなったのだろう。

胸の内側があんなに乾いているのに、耳の穴はまだ乾いておらず、中から銀色の液体が少しだけ流れ落ち続けていた。体の中でそんなに銀色をした液体はリンパ液しかないと思う。リンパ液は鼻の奥で作られ、血液とともに大脳に運ばれて、脳間というところに蓄積され、やがて水分が抜けると大脳皮質になる。だから、耳からリンパ液が流れ出してしまうと、僕の大脳はどんどん小さくなり、いずれなくなってしまはずだ。なにも考えなくてよくなるのだから、そのほうが幸せに決まっている。僕は耳から流れ出る銀の水を指で掬い取ると、指ごと舐めて味を確かめた。舌を突き刺すように酸っぱかった。これはリンパ液ではないのかも知れない。

小屋に戻る道は入り組んでいて、砂浜から少し離れると、僕はすぐに道に迷ってしまった。森の中や断崖の縁や、小さな泉の周辺に、僕の見たこともない似顔絵がたくさん落ちていて、「こっちに行きなさい」とてんでに違う方向を力説する。似顔絵はどれも僕の知っている人物で、それが誰なのかを言い当てられなければ、僕の命は尽きるのだろう。道がこれ程、複雑でなければ、すぐにも当てられるのだが、似顔絵がみな間違った道順を教えるので、どんどん道は暗くなり、入り組んでいく。

地面におちていた似顔絵は、勿論道端で繁殖していた似せ顔の花だ。何処かにいる誰かの顔をなぞって花は生まれるらしい。僕は何百枚もの似顔絵を拾ったが、誰の顔なのか思い出せたものは一枚もなかった。世界には意外な程多くの人間が生きているようだ。

迷い込んだ森の木の幹は皮が剥がされカレンダーになっていた。そしてそれにはこう書いてあった。

一月二十七日は、暦の上では偽曜日。人生は迷路だが、迷路を人生にしてはいけない、

一月二十八日

森の中でも木の葉の隙間から空の満月はずっと見えていた。

この島の月は自分で形を変えようとしな。僕が以前旅した町では、たいてい月は毎日姿を変え、同じ月だとは分からないように暮らしていたものだ。時々空から逃げ出す月も珍しくなく、街中や山中で捕らえられ連れ戻される場面を僕は何度となく見てきた。それと比べるとこの月は、少しも自分を隠そうとしな。まるで、ここでなら何があっても安全だとでも言うようだ。

勿論、記憶を失っているために、隠れるべき理由を思い出せないでいるのかもしれない。ただ、僕の見るところ、月に記憶がないというのは、あれは嘘だ。そもそも、記憶のない月があれば程空高くにいられる訳がない。見かけとは反対に、空にいるためには何億年分の記憶が必要なのだ。記憶がなくなれば、月といえども海に飲み込まれ海底から浮上することはできないだろう。第一、月というものは生まれつき嘘をつくようにできている。

魚もいなくなり身軽になった僕は、日の出とともに海面から浮上した風船(今日はオレンジ色だった)にしがみついて月に向かった。空に行くのは何度目だろうか。その度に空は低くなり、もう二度くらいこの旅を繰り返せば、空は手の届くところまで降りて来て、もう風船などいらなくなると思う。

朝の早いうちに僕は空のすぐ下にたどり着いた。風船が縦に細長くなり始めたので、僕は体を揺すって反動をつけ、月の上に飛び移った。月は僕に気づいていないかのように、何も言いはしなかった。言葉を忘れていたと言いたいのかもしれない。

間近で見ると月は縦に真っ直ぐ切れ目が入っていて、それを隠すように月の表面のスナップ写真が張り付けられていた。写真と本当の月の表面は、色も形もまったく違って、これでは切れ目を隠すどころかかえって切れ目を目立たせるだけだ。僕が島で月の切れ目に気づいたのも当たり前だった。

僕は、月の下側(島に近いほうのこと)に回り込み、島から見えた糸くずのようなものを探し

た。切れ目の下(島に近いほうのこと)のあたりを確かめると、それはすぐに見つかった。間違いなくそれは釣り糸で、鯨でも釣れそうなほどの太さがあり、どうもまだ生きていたようだった。

釣り糸というものは、目に見えない海中で獲物をさがし、獲物を捕らえ、獲物を連れ帰る仕事をするために、何かの動物を品種改良してできたものだと聞いたことがある。僕は、ポケットから小さめの湿った貝殻を取り出して釣り糸に与えてみた。釣り糸は大抵の釣り糸がそうであるようにひどく飢えていて、与えた貝殻を一口で食べてももっと欲しいとでも言うように僕の手にすり寄ってきた。(釣り糸はかなり太かったが、それでもしょせんは糸なので口は目に見えないほど小さい。ただ何かを食べるときだけ一瞬口は驚くほど大きくなる)それは間違いようもなくもっと欲しいと言っているのだ。僕は、あと一枚だけ貝殻の小さい欠片を与えた。それだけの事で、釣り糸は僕の言うことを何でも聞くようになった。僕は、釣り糸に名前をつけようかと迷ったが、それはやめることにした。

抵抗しなくなった釣り糸を指に絡ませて僕は少しずつ引っ張ってみた。糸が張り、月の写真が釣り糸によって真ん中から破れていく。順番に写真が破れ、月の切れ目が顕になっていった。

写真がすべて破れるまで気づかなかったのだが、僕は困ったことをしてしまったようだ。というのも、釣り糸は何かを釣るためにそこに置かれていたのではなく、月の切れ目を釣り糸で縫い付けていたらしい。写真が散り散りになって月の本当の姿が見えた時、釣り糸が閉じていた縫い目は一番下からてっぺんまでほつれてしまった後で、もう元にはもどせなかった。

真ん中で真っ二つになった月は(縫い付けられていても少しもくっつきはしなかったらしい)、みるみるばらばらになり、それぞれが勝手に空を漂い始めた。僕は足場失って空中に放り出されたが、釣り糸を握り締めたままだったので、無事に砂浜に降りることができた。

こんなふうにして、空に二つの半月が生まれた。追いかけてあっているのか、逃げ回っているのかは分からないが、相変わらずこの島の月は、自分では姿を変えようとしなない。

月明かりにてらされて、カレンダーにはこう書いてあった。

一月二十八日は、暦の上では我蓋。身近な誰かが、本当の姿を見せるでしょう。でも、運命はな

にも変わりません。諦めながら待て。

一月二十九日

朝、目がさめたとき、何もないはずの胸の奥で、かさかさという音が聞こえた。なんだかこそばゆかったのを見てみると、肋骨の内側の空洞にサナギがいた。すこしも動かず、まるで乾ききった標本のように、肋骨にしがみついている。

心当たりはまったくないが、きっと森の中をさ迷っている間に、住み着いたのだろう。何の虫のサナギなのかは分からない。ありふれた灰色の殻は少しも動かないから、生きているのかすら知りえない。ただ、サナギから漂う、何か甘いお菓子のようなおいさは、死んだ昆虫のにおいとは思えないので、きっと生きているのだろう。

甘いにおいは僕の体の中にあふれ、お昼過ぎにはそのにおいが、僕の体からもするようになった。とてもおいしそうなのににおいを嗅いでも、サナギを食べたいとは思わなかったが、自分の肋骨をすこし削って、食べてみようかという気持ちにはなった。きっとおいしいのに違いない。

間近でサナギを見たことがなかったから、サナギがこんなにも半月に似ていることに驚いた。眠り続けているときの半月を、小さくして灰色に塗れば、このサナギになる。もしかすると、半月は昆虫なのだろうか。

空には相変わらず二つの半月が、お互いから体を遠ざけようとしながらくるくる回り続けている。その二つを縫い付けていた太い釣り糸は二つの半月の裏側から伸びていて、弦の下の端を伝って空中に漂い、そして途中で一つにからまって一本になりこの砂浜にまで垂れている。はやくひっぱってくれと言っているかのように釣り糸は僕の目の前で揺れるのだけれど、迂闊に引っ張ればまたどんなことが起きるか分からないから、僕は、今回は慎重に時を待った。

満月であれ半月であれ、月は裏側を見せようとしな。誰かを隠しているのだろうか。それとも誰かが隠れているのだろうか。見えないのでは分からない。この分からなさから考えて、二つの半月を縫い付けた誰かがそこに隠れていても、すこしもおかしな話ではないだろう。だが、それを確かめるには、月の裏側に行ってみるしかないはずだ。今度はこの釣り糸をたぐつ

ていけば、迷うことはない。すでに半月がばらばらになってしまったのだから、これ以上、月に迷惑をかけることもないだろう。

夕方になるまでには、僕は半月の裏側を確かめに行かなくては生きている甲斐がないと思うようにさえなっていた。

ただ、サナギが羽化するまでは、あまり遠くに行かないほうがいいだろう。サナギの羽化を見届けた後で僕は月の裏側に行くことにしよう。

カレンダーにはこう書いてあった。

一月二十九日は、暦の上では蛹踊。何ひとつ言わないということは、すべてを語るということだ。

一月三十日

これまでの日記を読み返してみると、この島での一日の時間が次第に短くなっていることがよく分かる。

昨日にいたっては、蛹をみつけて、月の裏側を調べに行くことを決意するだけで一日が終わってしまっている。

この島には本当に時間があるのだろうか。僕の故郷で流れていたような時間がこの島でも流れているのかどうか、どうもあやしい。

時間を確かめようとポケットから縁の欠けた貝殻を出してみると、折り捨てたはずの部分がもう元に戻りかけている。内側に書かれている時刻も、色が青く変わってしまって、まるで昨日の時刻のようだ。他の貝殻を何枚か出してみると、なんだか全部同じ貝殻になっているように見える。色や形や縁の欠け具合などどれも区別がつきそうにない。内側に書かれている文字が違うのかもしれないと貝をひっくりかえしてみると、どれにも同じ文字が書かれている。この島では時間は、遅れたり進んだりすることさえできないようになっているらしい。

屋前に、海のほうから、列車の発車ブザーがかすかに聞こえた。海の上の鉄道が開通したのだろうか。しかし、こんな海の上に駅があっても、海より他には何もないのだから、駅から外に出ることもできないだろう。そんな場所に駅を作るものだろうか。あれは発車ブザーではな

いのだろう。あれは鉄道ではないのかもしれない。第一、線路らしいものは見たが、列車は一度も目にしていない。

もしかすると発車ブザーだと思ったのは、あれは時報ではないだろうか。ちょうどお昼の時間を告げる時報が鳴ればいいなと思っていたところだ。そしてあれが時報だとすれば、この海の上の鉄道だとばかり思っていたものは、巨大な時計なのに違いない。線路で作られた時計なら、確かに丈夫で時間を間違えることもないだろう。

午後一時にまたブザーが聞こえたような気がする。とてもかすかにしか聞こえないので、海岸に打ち寄せる波の音がきまぐれにそんな音を立てているだけかもしれない。いずれにせよ一時になったので、僕は海岸から離れ、乾いた砂の上で日向ぼっこをすることにした。胸の奥に陽をあびて、蛹の成長を助けるためだ。だがあまりにも強い日光は、蛹の乾いた表面に火を起し、運が悪ければ蛹は死んでしまうだろう。僕は、シャツを開いたり閉じたりして、そんなことにならないように気をつけた。

夕方になると僕は月から垂れている釣り糸にぶら下がって、島の端から端までを振り子のように渡ってみた。海岸から森を抜けて反対側の海岸へ、絶壁の上をぐるりと回って戻ってくる。こんなふうに島の上を移動できるのはとても楽しい。往復はほんの30分ほどしかかからないのだが、その間ずっとぶらさがっていると、釣り糸が手に食い込んでとても痛い。毎日続けるのは無理だろうと思う。しかし、蛹が飛び方をはやく覚えられるように、僕は明日も振り子のように島の上をめぐるだろう。

カレンダーにはこう書いてあった。

一月三十日は、暦の上では飛月。時計の事ばかり考えていると、時間はあっという間に時計より速く過ぎていきます。

一月三十一日

僕は蛹の夢を見た。

夢の中に蛹が出てきたという意味でなく、蛹が見ている夢を蛹であるはずのない僕が見たという意味だ。

僕(蛹の僕)が見ている世界はジグソーパズルのように入り組んだ曲線で分割されていて、少し身じろぎするだけで世界はその曲線に沿ってばらばらになる。破片になったパズルを目の前にして、僕は(蛹はということだが)また初めから世界を組み立てなくてはならない(すると僕はずっとパズルを組み立て続けていたのだ)なと思う。ばらばらになる度に曲線は細くなり(最初はたった一本の線だったような気がする)、組み立てるのにもずいぶん時間がかかるようになってしまった。それでも、完成した世界は、何度作り直されても全く同じだ。世界は灰色のぼんやりとした陰影でしかなく、それもほとんど濃淡のない灰色だから、僕(夢見ている方の僕)は、この蛹である僕が見ている世界は僕の知っている世界とはまた別のものなのだろうと思っていた。

細くなり続けた曲線はやがて世界を粉末に変えてしまった。あまりにも細くなりすぎて、僕にはもう拾い上げることもできない。細かく埃のように漂う世界は、灰色の広がりでしかなく、僕には今まで何度も完成してきたあの世界と同じように見えた。ただこの埃はとても冷たくて、僕の上に埃が積もり重なっていくにつれて、自分がすこしずつ凍っていくのが分かった。先端が凍り、それが表面に広がり、それから僕の中心に向かって、僕のなにもかもが凍りついていった。最後に、僕の心にその冷たさがたどり着いたとき、僕は眠ってしまったらしい(夢の中だというのに)。

氷の中で眠りについた僕は、炎のなかで目覚めた。身体中の細胞が一つ残らず炎に炙られていた。訳もわからず僕は身をもがき火の弱そうな所へと動き続けた。炎の向こう側にはまだ見た事のない新しい世界が見えた。蛹の僕には分からない事だったが、その世界は目が痛くなるほどたくさんの色彩に溢れていた。世界の中心には生々しい原色が鼓動を続けていて、脈打つ度に色の塊を吐き出し、周辺に飛び散らせる。その軌道は常に直線で、そのまま世界の先端へと突き進んでいく。並行な軌跡が世界を色彩で切り分ける。色は中心から離れるにつれて変質し、その変化を維持できなくなった直線は、新しい色を産んでそれぞれがまた別の方向へと分岐する。見る見る間に世界は色彩の直線に分割され、それぞれの領域がまたより繊細な色の差異によって切り分けられていく。

ぼくの体を焼く炎にその色彩の軌跡が触れると、炎は冷めて、僕の体のその部分が軌跡の色に染まっていく。色づく時、僕の心は興奮し、何も恐れるものなどない事を確信する。色彩が体に染み透る時、僕のすべてが快感に痺れ、力強い色がもっと乱暴に僕を変えてくれればと願った。いずれ僕の体は無数の色彩に飾られ、この光の世界の一部になってしまうのだろう。僕は、色彩の執行者として、世界を征服に旅立つだろう。僕は疑いもなくそう確信してい

た。

やがて僕を苦しめていた炎は消滅し、苦しみから救い出してくれた色彩が、僕を全てのものから守ってくれていることが分かった。何故なら、世界は無限の色彩が整然と分割し統治する結晶に過ぎないのだし、結晶に守られている僕を傷つけることなど誰にもできはしない。

蛹の夢から目覚めると、胸の奥の蛹は既に脱け殻で、空の二つの半月の間を、蝶が飛んでいくのが見えた。蝶は陽の光の中でさえまぶしいほどに輝いていた。赤みを帯びた紫色を放っていたかと思うと、一瞬にして軽やかな薄緑色にかわり、つぎの瞬間にはオレンジ色の光で、ただ遠くで見ているだけの僕の目に熱い熱を感じさせた。

その輝きが目を貫くたびに、僕の中から何かさらさらとした水が流れていった。その水は砂浜に跡を残すこともなくすぐに消えていった。

その水のせいではっきりとは見えなかったが、カレンダーにはこう書いてあったはずだ。

一月三十一日は、暦の上では失色。夢見た事を現実と取り違えた事は誰にも言うてはならない。

一月三十二日

蝶はいつまでも輝いていたので、昨日は夜が来なかった。

風のない空を、蝶はゆらゆらと昇っていった。その不規則な、落書きのように見える蝶の軌跡が、蝶にとっては空の頂点に至るただひとつの最短の軌道なのだと、僕は分かっていた。たぶん、二つの半月もそのことは薄々、気づいているのだろう。半月は代わる代わる蝶の前にまわり、鳥やカブト虫が蝶の飛行の邪魔をしないように追い払ってくれていた。やがて蝶が半月よりも高くに到達すると半月は何もできなくなったが、そんなに高い空にはもう鳥もカブト虫もいはいない。

どれだけ蝶が空高く昇っても、僕には蝶の姿がはっきりと見えた。少しも小さくなっていかないのは、蝶が次第に大きくなっているからだろうか。それとも、蝶は同じところで羽ばたいた

ていて、空が少しずつ蝶の方へと下がってきているのかもしれない。空が下がっているのなら、耳鳴りがしてそれと分かるはずだが、僕の耳は魚達のウロコで傷ついているので、耳鳴りを感じることはもうない。空が下がってきているのなら、半月の上の端が空に触れて崩れ、月のカケラが空に飛び散って星の数がもっと増えているはずなのだが、空は蝶の輝きに照らされて、星など一つも見えはしない。

少しも変わらない蝶を見つめているうちに、僕は眠っていたようだ。気がつくと、空にはもういつものように、二つの半月しか見えなくなっていた。蝶は空に達する前に、動けなくなり落ちてしまったのか、空に辿り着き空の裏側に忍び込み、それで見えなくなったのか、肝心のところを僕は見逃していた。

海に落ちていたら浜辺に打ち上げられているかも知れないと、漂流物を探して海岸を歩いた。砂は蝶の光を一晩中浴びていたからか、紫色や黄色、赤色に緑色と色を変えながら光を放っていて、岸に置き去りにされている何でもない海藻が、蝶の羽根のように見えてしまう。そんな偽物の蝶を拾っては手に持ち引き摺りながら、僕は海岸を歩き続けた。

蛹が急にいなくなりバランスの取れなくなった僕の体は左に傾いていて、僕は海岸を歩いているはずだったのに、気がつくと森の中で道に迷っていた。いつまでも森から出られないのは、また島が変わってしまい、森が何倍にも大きくなったからだ。僕は思い込み、いつもの森の出口を見つけられないまま、僕は歩き続けた。森の中では昼なのか夜なのかを知る方法がない。梢の葉の隙間を零れた光はすぐに幅の広い飢えた葉に襲われ、我先にと噛み付かれ齧り取られて、僕に触れる前にほとんど無くなってしまふからだ。葉から逃れることのできた微かな光の屑が地面でゆっくりと消えていく短い時間に、僕は次の一步を何所に踏み出すかを決める。僕の両足は消えていく光に追いつけず、いつまでも腹を空かせたまま、やがて歩き続けることもできなくなるだろう。僕は森の中で動けないまま立ち続けていた。

暗くてまったく見えなかったが、カレンダーにこう書いてあることは確かだった。

一月三十二日は、暦の上では蝶失。失せ物は靴下の中で見つかるでしょう。靴下を無くしていたらただちに望みを捨てなさい。

一月三十三日

なにひとつ光のない場所で立ち続けていた。立っているのか逆さまなのかも分からなかった。体はどんどんこわばり、自分がすでに樹木に変わってしまったのだと気づいた。足は土の中にもぐり、液体が染み込んでくるのが気持ちいい。肌が風と話すことができるなど想像もしなかった。体中の表皮が森の中を流れる風に触れては遠い国の話を聞いている。肌の内側に流れる水が、楽しい土産話を聞いて温かくなっていく。

僕のポケットを破れそうなほど膨らませていた貝殻は、いつのまにか僕の指にまといつき、光があれば深い緑であるはずの葉に変わっていた。曇った空気の塊が、これほどうまいということも知らなかった。葉はざわめいて、もっとたくさんの空気を欲しがっている。樹木になった僕は、ぼんやりと闇をながめていた。闇の中から生まれるたくさんの虫が、生まれては飛び立ちまた帰って来た。どうも僕は未来のことも過去のこともすべてを知ってしまったようだ。未来も過去も知ってしまうということは、現在を失うということだ。僕は時空間にちりばめられた自分の意識を、ただ遠くにあるのだなと思い、悲しみを感ずることさえなかった。

だからそれがいつなのかは分からないのだけれど、森の中のどこかからピアノの音が聞こえてきた。誰かが演奏しているのだろう。何度も間違えながらそれでも最後まで弾き続ける。そんな演奏は過去にも未来にもありはしなかった。だとすればピアノの音はまぎれもなく現在で響いているのだ。僕は過去と未来に存在する間ずっと目を閉じていたのだけれど、永遠の時の中でそのときはじめて、目を開いた。森の闇の中で灰色のピアノが木の枝に演奏されていた。でもよく見ると木の枝は少しも動いておらず、ピアノが自分で鍵盤を枝にぶつけて演奏しているのだった。灰色のピアノは体をねじりながら動いているために、弦の音だけでなくペダルや蓋やたくさんの接合部分がきしり、甲高い音をあげていた。

樹木から人間になるというのはとても気だるい作業だった。何度もこのままでいいかなと思ったが、そのたびにピアノで奏でられる行進曲が、留まるなと命じた。葉が貝殻に戻るとき、指がこそばゆくて僕は笑い声を押しえきれなかった。葉はカタカタと音を立てて貝殻になり、僕のポケットに戻っていった。僕の肌はそう簡単にはやわらかくはならなかった。肌の下に含んだ空気が、湿気が表面に出てくるのを邪魔していたからだ。僕はどうなっているのかを知りたくて、すこしかさかさになった体を手で撫でてみたのだが、手がこすれるたびに、足元に木屑が落ちていき、それを続けると僕の体は肌のない丸裸になってしまうはず。僕はそれ以上自分に触ることはやめた。

湿った土から足を引き抜くと、急に体が重くなった。水がなければ僕は何者でもないのだ。

とても心細くなって、また樹木に戻りたくてたまらなくなったが、ピアノはそれを見透かして、水底の音楽を披露してくれた。その曲に含まれる新鮮な水分が僕を力づけ、僕は人間でいることを選択できた。

人間になった僕を案内するように、ピアノは動き出した。通りすぎる木の枝に鍵盤をなぞらせて、ふらふらと歩き続けるための曲を奏で続けた。その曲は今でも覚えている。曲に合わせてゆらゆらと揺れているカレンダーには、こう書いてあった。

一月三十日は、暦の上では詠遠。あなたの南側に植木を置けば基地。自分が積木になるのも基地。

一月三十四日

森から抜け出ると、外はもう昼に近かった。

僕の体を覆っていた樹皮は、森の中で木の枝や葉に触られてほとんどが剥がれてしまっていた。森を出て、残ったものも自分の手で払い、僕はずいぶん人間になったように見える。でも、そのとき気がついたのだけれど、僕の体はすこし色がうすれ、向こう側が透けて見えるようだ。内蔵や骨格が見えるわけではなく、例えば手のひらを目の前にかざすと、その向こう側の光景が手のひらに映って見える。どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

グラウンドピアノにしては黒が薄くつやもないけれど、こんな無人島では誰も面倒をみてはくれないのだし、仕方のないことだ。森から離れ海岸に続く道に出たところで、僕はピアノと別れた。一緒に行かないかと誘ってみたが、海はもうこりごりだとピアノは答えた。そのまま立ち止まってピアノは別れの歌を演奏してくれた。離れて姿が見えなくなってもずっと聞こえていた。

夕方になって海岸に立ち水平線に船影を探していると、すでに胴体までもが透き通っていて、もしも船が来たとしても、僕に気がつくことはないのだろうなと思った。そして、自分が透明になっていく理由に思い至った。たぶん、あの蛹は森の中で拾ってきたものなどではなく、もともとは僕の一部分だったのだろう。どの部分なのかは分からないが、きっと大切な部分だったのだ。そして、その蛹が蝶になってどこかにいなくなってしまったために、僕は自分を失い始めているのだろう。森であんなに簡単に樹木になるなど、そうとでも考えなければ

ありえない。

蝶を取り戻すことはできないだろうから、僕はいずれこのまま消えてしまうのだろう。無人島がまた無人島に戻るというわけだ。考えようによっては、お祝いが必要かもしれない。でも、その前に、僕は半月の裏側に何かあるのかを探しに行こう。釣り糸をたぐって行けば、それは簡単な冒険だ。右側の半月と左側の半月の両方の裏側を調べて戻るのに、そんなに時間はかからないはずだ。半月に辿り着くまでに僕が消えてなくならないかどうか。それは心配だけれど、もしも僕がいなくなっても、いつかピアノが僕の代わりに確かめに行ってくれるだろう。ピアノにもそれは分かっている。

僕は今、釣り糸を左手に撒きつけてこの日記を書いている。日記を書き終えたなら釣り糸を手繰って半月へと昇って行こう。出発すれば日記を続けることはできないだろう。だからこれが一月最後の日記になる。一月の日記の終わりだ。

カレンダーの一月の最後にはこう書いてあった。

一月三十四日は、暦の上では月昇。忘れてしまったあれこれは、なかった事にしておけばよいでしょう。